

文學博士 金澤庄三郎述

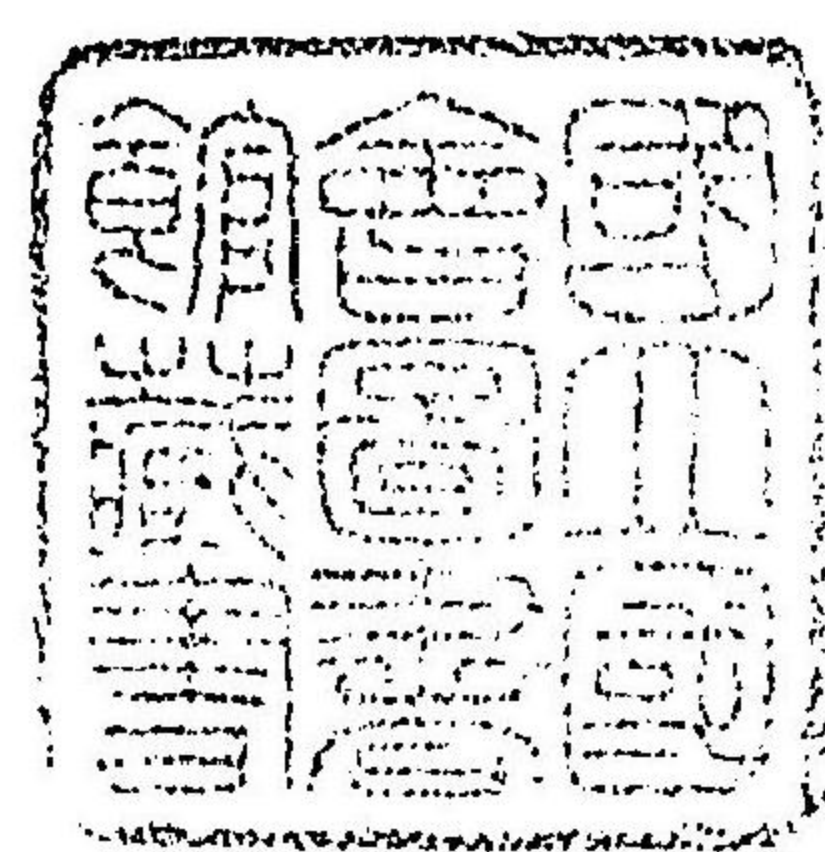
日本文法講義

明治二十八年十月  
二十九年九月

早稻田大學出版部藏版



815  
Ka37m3



221851

# 日本文法講義目次

緒論	一
總論	五
第一章 日本文法に關する本邦及外國諸學者の研究小史	一七
第二章 聲音學小話	四七
第三章 文字論	六三
單語論	六五
第一章 體言論	六五
第一節 名詞	六五
第二節 代名詞	七二
第三節 數詞	七四
第二章 用言論	七七

日本文法講義 目次



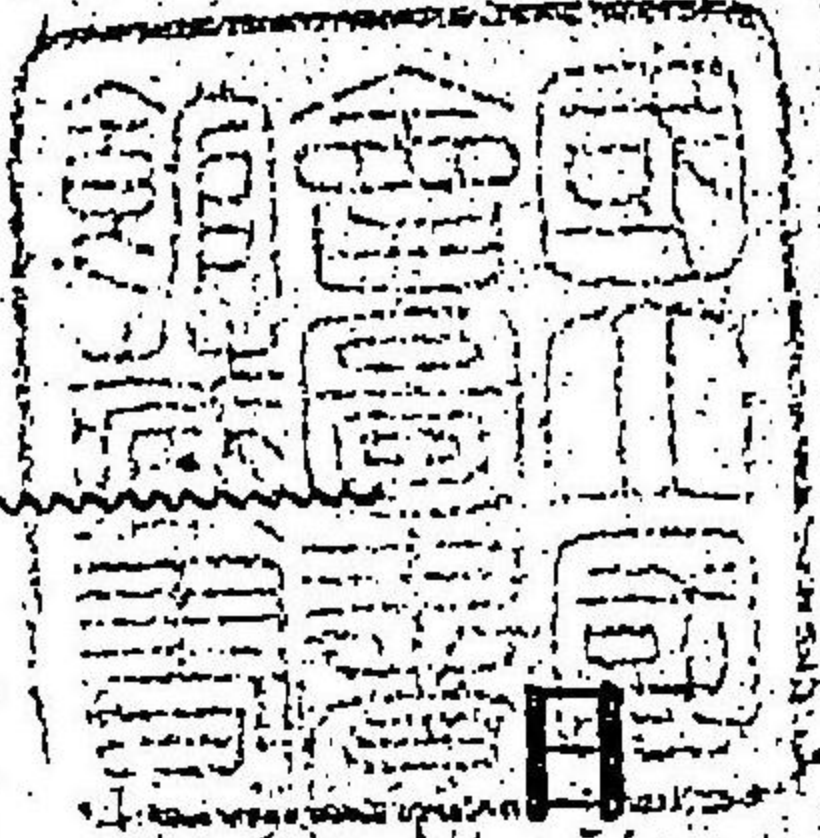
第一節	動詞	七七
第二節	形容詞	一一一
第三章	助辭論	一二四
第一節	助動詞	一三五
第二節	副詞	一五二
第三節	接續詞	一五四
第四節	豆爾乎波	一五五
第五節	感動詞	一七三
第六節	複合語	一七八
第七節	疊語	一八〇
第八節	接頭語接尾語	一八一
文章論		一九〇
第一章	總論	一九〇
第二章	枕詞	一九三

第三章	言掛	一九六
第四章	掛結	一九七
第五章	呼應	二〇五
第六章	略語	二一一

# 日本文法講義目次

終

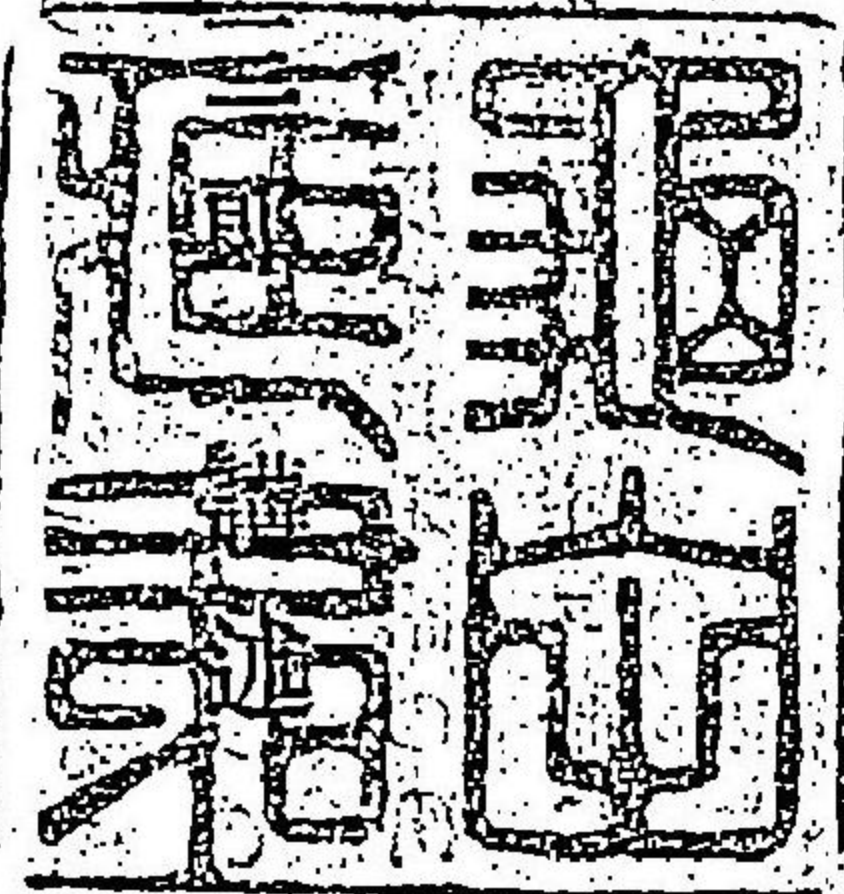




# 日本文法講義



文學博士 金澤庄



## 緒論

日本文法の講義を始める前に一言辨じて置くことがある。こゝに文法といふのは對話の語即ち口語の文法に對する文章語の文法である。それ故正しく讀み正しく書くために教えるものであるが、普通に之の文章語の方則を中古或はそれより以前の言語に採つて居る古文を解釋する上に此等の語法の必要は勿論であらうが、これを以て今の文章の標準とするのは如何であらうか、極端の例をいはず、係結の規則の様なものは今の普通文に於て何の必要もなからう、それ故に此等の文法は主として古文解釋の上に應用せしめ、今日の文章に對しては別に中古以降の國語の變遷に鑑みて、一層適切なる文法を制定すべきである。しかしこれは自分の意見ばかりで、其實行は容易の業でない、それ故此處に講義をするのも矢張從來ありき



たりの文法である。そのありさまの文法もどうかといふに、決して完備して居るとはいはれない、一昨今日の文法學の基礎は、多く徳川時代の學者の手になつたもので、此等の學者即ち宣長春庭義門等の諸大家の國語學上に於ける功績は實に偉大なものであるに相違ないが、しかし此等は既に百有餘年以前の事業で、今日より見れば更に補ひ直すべき點が少くない、我等は古への學者の仕事を尊敬すると同時にこれを増補訂正すべき任務を持つて居る、昔の學者の研究は日本語單獨であつたがために、獨斷的の弊を免れなかつたが、今日はこれに引きかへ世界各国の言語一として研究せられざるはなしといふ有様で、國語學者は自由にその中より比較の材料を得らるゝのである、殊に我國語と密接の關係ある朝鮮語と遠く南海に孤立して居る琉球の方言などは、何れも豊富なる材料を捧げて新進の學者を待つて居るのであるが、自國の語を尊重する餘りに他の國語を輕んずる古風がまだ去らないといふのもあらうか、今日に至るまであまり此方面に手を出す學者がない、反て日本語の研究にはまだ日の淺い外國の人が着々調査を進めて、朝鮮語琉球語乃至アイヌ語に

至るまで熱心に取調べて、國語研鑽の資料として居るのは、彼に對しては感ずべく我々に於ては耻づべきことではないか、之を要するに、吾人は古人の學說に對しては飽く迄研究的態度をとり、聲音學の原理により音韻の變遷を考へ、他國の語と照し合せて未知の事實を發見し、古人の研究以外更に一步を進むるといふ覺悟がなければならぬ。

しかしながら、言ふは易く行ふは難して、我輩の如きも微力にして、いまだ希望の一分をも達することが出来ないが、たゞ終生及ぶかぎり盡す積り居る、それ故此講義中にはまだ研究の半途に屬するものも多い、これは豫め讀者の注意を乞ふて置く、講義の順序は、先づ日本文法に關する本邦及び外國の諸學者の研究を畧述し、次に聲音學原則の概要を述べて、國語音韻の變遷を論じ、次に文字を論じて、我國に行はるゝ假字及び漢字の性質を説きて、その文字史上に於ける位置に及び、以上を總論として、次に單語論に移り、片言用言助辭の三篇に分ちてこれを述べ、最後に文章論を説きて本講義を終らうと思ふ、便宜のため條項を立て、左に記して置く。

### 總論



第一 日本文法に關する本邦及び外國諸學者の研究小史

第三 聲音學小話附國語音韻轉變の原則

第三 文字論附國字の過去及び將來

單語論

第一 辨言論

第二 用言論

第三 助辭論

文章論

（以下は非常に小さい文字で書かれた、ほとんど不可読な注釈や補記と思われる文章である）

總論

第一章 日本文法に關する本邦及外國

諸學者の研究小史

もとく言語は人間が先天的に持つて生れたものではないが、生れ落ちた其時から絶えず耳にして人心のつく頃までに知らずしらず覚えてしまふものであるから殆んど第二の天性の様になって、別段改めて教へたり學んだりすべき性質のものでないのである、それ故いづれの國に於ても言語の研究は其國語が他の國の言葉と相接するまでは始まらない様である、ギリシヤの文典は其國の學者がローマの人にギリシヤ語を教へやうとする時始めて工風せられ、印度及び支那の音韻學は其境域内にある數多の方言の比較よりはじまつたとの事である、我國語の研究も此例にもれぬので、古は言文同一途に出たものであるのを、口語は時と共に變遷し文章殊に歌謠のみ古の風を維持してゆくから、こゝに言文の間に差異を生じ、恰も二種の國語が相接した場合と同じ有様となつたので、言語に關する研究がはじ



まったのである、猶詳しくいへば口語に於ては發音も語法も變て居るのに、歌文に於てはやはり古のまゝの綴字法を用ひ文法を守つて居るのであるから、此歌文を正しく作りまた解する事は、恰も別の國語を學ぶのと同じの修養を要することゝなり、爰に所謂歌道の口傳秘傳といふものが出來たのである。

先づ假字遣に於て古く最も有名なのが定家假字遣で、手爾波の規則も同じ人の選と稱せらるゝ手爾波大概抄が最も勢力あるものであつたが、假字遣に關しては第十七世紀の終に難波の契冲阿闍梨はじめて歴史的假字遣をとなへ、其和字正濫抄(元錄八、一)和字正濫要略(元錄十一、一)は斯道に於て動かすべからざる根底を作つた、又手爾波の研究は其後姊小路家の家傳といふ秘傳手爾波抄(元龜元、一)又は姊小路式といふものが出て是が久しく勢力をしめて居たが、十八世紀の末つかたに富士谷成章翁のあゆひ抄(安永七、一)といふものが出た、成章は一代の國語學大家で手爾波の研究は先生の事業の一部分である、即ち翁は言語を名裝ナマカゼ、かざし、あゆひの四種に分ち各に對する研究をして居る、其中裝抄は活用言を研究したものであるが惜いかな、今日に傳はらないで僅に其一部分があゆひ抄の卷首に載つて居るばかり

である、次に現れたのが有名な本居宣長先生で先生に至つて始めて呼應即ち係結の規則が発見せられたのである、其手爾乎波紐鏡(明和八、一)は三條の大綱に分ちこの關係を論じて居る、又この規則を古歌の實例に依つて證明したものが言葉玉緒(寛政四、一)で、係結の呼應と相聯關して活用言に關する翁の研究御國詞活用抄(天明七、一)がある。

そも、活用言に關する研究は古くよりかれこれ見えななくてもないが、一の形をなして現れたのは加茂の眞淵の語意考(寛政元、一)が始めて、これには動詞の活用を五才音圖にあてはめて、横の音に(1)言初むる言(2)言動かぬ言(3)言動く言(4)言令する言(5)言助くる言と分けて解いてある、其次は前に述べた富士谷翁のあゆひ抄の卷首にある裝の一部分で、之には活用言を事狀コトナリの二に分ち更に事を事孔狀コトナリを在芝アツシ鋪シヤに細別してある、然しながらかく時を同じくして現れた本居富士谷二大家の學説は何れも公にせられず、活用抄の方は寫本のまゝ傳はるのみで、裝抄の方は遂に見るよしもない、それで宣長の嗣子春庭が宣長翁の志を繼ぎて大成したものが詞八衢(文化五、一)で、此書物には始めて活用を四種即ち四段、一段、中二段、下二段に分ち、



たゞ今日と比ぶれば下一段のない位で殆ど動詞研究の根本を作つて居る、同じ著者の詞の通路(文政二十一)は所謂自他の別即ち自働詞、他働詞、所相、使役相、及び延約等を論じたもので此種の著述中最も有名なものである、その次に現れた學者が若狭の僧東條義門で、此人は前記諸大家の學說に自己の創見を加へて大成をはかつた人である、先づ其友鏡(文政六、一)は宣長翁の紐鏡を春庭の八衢で潤色したもので、五轉五十二段に分ち將然、連用、截斷、連體、已然等の名稱も師が初めてつけたのである、其他玉緒線分(天保十二)、山口棗(天保七、一)、活語指南(天保十二)、活語餘論(天保十三)等に於て、手爾波及び活用言に關する諸説を増補修正し、これを今日用ふるものと殆ど大差なきまでに發達せしめたのは偏に師の功績である。

これまでの研究は重に作用言のみであつて形狀言の事は甚くはしくない、全體この形狀言は富士谷翁のあゆひ抄の序文の中に裝の事を述べてある中に、さまざまのささまありさまとして分類してあるのが始まりで、八衢にもこれについてはあまり述べてないが、義門の著述殊に山口棗、活語指南等に於て頗る精密な研究があつて、其後物集高世の辭格考、權田直助の形狀言八衢等に至て、いよいよ精密となる事

は成つたが、要するに形狀言の研究は作用言に比して甚見ととりがせらるゝのである。

さて國語全體の分類については、前にのべた富士谷翁のあゆひ抄を先登として、義門の玉緒くり分にも體用の二種に區別してあるが、其後鈴木明の言語四種論(文政四、一)に體の語、手爾波、形狀の詞、作用の詞の四つに分けてから一層精密に成つて來た、これと前後して色々の學者が種々の著述を公にしたが、概ね玉緒八衢通路等の増補訂正でなければ、一局部に關する議論のみで、毫も日本語法の大勢に關する意見は出なかつたのである。

其後西洋の語學が研究せらるゝと共にこれを日本語に應用する學者が出來た、則ち鶴峯戊申の語學新書(天保四、一)の如きもので、これには和蘭陀文典を模範として語を分類し、實體言、虛體言、代名言、接續言、感動言等の名前も見えて居る、これが歐羅巴式文典のはじまりで、それより明治の御代に至り世に現れた文典は殆ど數へきれないほどである、勿論此等の諸文典は互に其短をすて長をとり、日に日に進歩して居るに相違ないが、惜しいかな彼等が研究の材料とするところは、徳川時代の學者



と少しも變りがないので、同じ品物を多少かはつた方角から見るといふに過ぎない、それ故枝葉の議論に於ては無論昔より進歩し整頓して居るには違ひないが、根本に於ては徳川時代の學說と何等の變動も進歩もない、例へば形容詞の如き我國語の性質として其價值毫も動詞と變らないにも係はず、八衢等に於て研究のいまだこれに及ばざりしがため今日に至るまでも遅々として進まないものである、かういふ有様であるから一方に於て外國人が我國語に關して如何なる研究をなしつつあるかを觀察する事がきはめて重要な事である、彼等は日本語に關する智識に於てこそ不足であるが、言語一般に關する見識は遙に我國の學者に勝れて居る、我々はこれより彼等の研究の重なるものにつき概略の説明をこゝろみやう。

### 日本文法に關する内外諸學者の研究小史 (二)

始めて日本語を研究した外國人はイスパニヤ人とホルトガル人でそれからフランス、オランダ、最後がイギリス人で、其他の國々はとりたてゝいふほどでもない様である。先づ最初に我國に來た西洋人はホルトガル人で、それはかの西暦千二百四十二年種ヶ島に漂着したセイモト (Seimoto) タモタ (Da Motu) ヲイシヨタ (Poisotia) の三人であるが、これらは別に國語に關係したこともなかった。次に天文十八年(一五四九)イスパニアの宣教師フランシスコ・コシヤ・ベヘル (Francisco Xavier) が來て、布教上の必要から國語を研究して聖書の翻譯を其時の口語でした。また語彙の著述もある。それより十六世紀十七世紀の間に多くの宣教師が來て、種々の著述が現れたが、最も古い文典はホルトガルの宣教師アルバレス (Alvarez) ので、これは第一版がリスボン(一五七二)第二版がローマ(一五七四)第三版が天草(一五九三)で出て居る。其次に有名なのはホルトガルの宣教師ロドリゲス (Rodriguez) の文典で千六百四年長崎の出版であるが、これはラテン式で略體裁を備へて居る。此人はよほ



ど我國語に通じて居たものと見えて、天正十八年(一五九二)イタリアの宣教師  
者バリニエーノ (Valignano) が秀吉に謁見の時、巧に通譯して秀吉を驚かせたとい  
ふ事である。次に千八百三十二年ローマでホルトガルの宣教師チダゴ、コルリヤ  
ド(Didaco Callado)の文典が出版せられた。これは當時の口語法で對譯字彙も添う  
て居る。次に千七百三十八年にメルヒョール、オイヤングーレン (Melchor Oyanguren)  
の文典がメキシコで出版せられた。此人はビスケーアの生れで、長くコンシン支那及  
びフィリピン群島にフランシスカ派の宣教師として滞在して居って、日本には來な  
かったのであるが、タガラ (Tagala) 語と日本語との比較研究をもして居たとの事  
である、しかしこれは惜いかな今日に傳つて居らぬ。

以上は多くイスパニヤ、ホルトガルの宣教師の事業で、その研究も實用的に傾いて  
居る。これより以後十九世紀の初に至るまで殆ど百年の間は、日本外交の杜絶や  
ら歐洲に於てゼスイト(耶蘇會派)の非運やらの結果、長く外國人の研究を見なかつた  
が、十八世紀のはじめに至りて、オランダ人とフランス人が再び我國語の研究を始め  
た。佛人ランドレー (Landress) がアムル、レミッサー (Abel-Rémusat) の監督のもとに、

千八百二十五年かのロドリゲスの文典を翻譯したのを始とし、千八百六十三年に  
はパリの東洋語學校(一七六〇)創立に日本語科を加へ、千八百七十三年パリに於け  
る第一回萬國東洋學會の報告にも日本語に關するものが多く出た。これより先  
き千八百二十三年に有名なるオランダ人シーホルド (Sebold) が長崎に來り、日本  
語の研究をはじめた。先生の著述は千八百三十六年パダビヤで出版せられて居  
るが、その門下に Hoffman (Hoffmann) といふ人があつて、此人が長崎出島の商館に居  
たドンケル、クルチウス (Donker Curtius) の作つた文典を校正して、千八百五十七年ラ  
イデで出版したが、これを前驅として千八百六十八年に有名なる日本文典を英蘭  
兩文で (Japanese Grammar: Japanische Sprachlehre) 同時に出版した。此文典は頗る創見  
に富み、今日に至るまで學者の最も珍重する所である。此文典中に氏は始めて日本  
波行の古音につき疑をいだき、色々例證をあげて今日のh音はもとf音であつたと  
いふ事を論じて居る、其他動詞の語根活用等についても頗る名論が多い。此様に  
研究が段々學術的になつて來ると同時に、一方に於て日本語と他の國語との比較を  
試みる學者が追々現れて來た。即ちかのシーホルドが千八百三十二年パダビヤ



て出版した日本人種論にも、言語を重なる材料として日本、滿洲、朝鮮、琉球、アイヌ等の語の比較を試みて居る。

それで日本語研究の機運も漸く熟して來たが此頃からイギリス人が活動しはじめた。即ち當時英國公使館の通譯官であつたアストン(Aston)の日本口語文典(Short Grammar of the Japanese spoken language)及び文章語文典(Grammar of the Japanese written language)の第二版が千八百七十七年に出たが、此文章語文典は國學者の説をあまり参考して作つたもので、外國人の著述中最も信用すべき者である。それに此人の研究には他の外人の及ばざる一の點がある。それは此人が日本語と朝鮮語とを比較して得た智識で、千八百七十九年に日韓兩國語比較研究(A comparative study of the Japanese and Korean languages)として出版せられて居る論文に於て氏は此兩國語の同一語族たる事を確信し、終始相對照して攻究したのであるから、此文典が一種の異彩を放つて居る譯である。例へば名詞の格を表はす豆爾波の語原が動詞であるといふ事、動詞諸種の活用の本原は一に飯すといふ事、此古活用に最も近きものは四段活用なる事等はいづれも氏が比較研究より得たる結果と考へられる。

其次に現れた學者は今の東京帝國大學名譽教授チャンバレン(Chamberlain)氏で、其著述は日本小文典(A simplified grammar of the Japanese language)、日本俗語文典(A handbook of the colloquial Japanese)等澤山あるが、先生はまた琉球語を研究してアストンの説に更に一步を進めた。其琉球語研究は千八百九十五年に横濱で出版せられて居るが、これに依つて先生は益々日本動詞活用の一原論を確め、且新たに琉球語の智識により、アストンが四段活用なりと定めた日本動詞活用の古體を、奈行變格なりと推定せられた。

此他なほ云ひもらした學者も著述も極めて多い、又其著述一々について詳しく述べたならば、頗る有益なる觀察も少くはないが、此等は他日一部の國語學史として世に出だす機會もあらう。しかしこれ丈でも概略は今日に至るまで外國人が日本語に對して幾何の研究をとげて居るかは知られるであらうと思ふ、即ち日本の學者は自分の國語であるから其研究が緻密な點に於て外人の及ばぬといふ事は、もとより當然で別に誇るべきわけでもないのみならず、まだ研究の日淺い外人が倦まず弛まず廣き見識を以て日に月に研究を進めて行くのに對しては、寧ろ顔色



なしといふべきである。それ故今日の新進學者はよろしく此等内外諸學者の長をとり粹をぬき國語學の基礎を大成する覺悟がなくてはならぬ。さてこれより章を改めて音韻の事を述べる筈であるがこれは聲音學(Phonetics)と稱へ別に一科の學となつて居るもので言語を論ずるには何よりも先づ知らなければならぬ學科である。しかしこれも詳しくは一卷の書として他日世に出だす考て、此處ではたゞ文法に必要なだけをやと述べる積である。

## 第二章 聲音學小話

聲音學とは Phonetics の譯語で、これは西洋でも極新らしく出來た學問であるから、まして我國では耳新しく聞えるであらうけれども、聲音即ち音韻に關する研究は我國に於ても古くより行はれた者である。總體言語に關する學術はことだまのさきはふ國の事であるから、古より他の事に比べて餘程開けて居つた者で、音韻に關する事も亦其一である。先づ其初は支那文學の輸入せられた時の事、これにて文字といふ者を知らなかつた我國民が此便利な利器を得てこれを利用せんが爲めに苦心した事は一通でなかつた様に思はれる。即ち性質の異なる國語である支那の文字を以て我國語を表はさうとするには餘程の工夫を要した者で、望多威口佐伯邑樂男信久良香山等の地名に徴しても其一斑が知れるのである。其結果出來た者が所謂萬葉假字で、其草體の更に變じた者が平假字である。しかし伊呂波歌といふ者は空海が和讃の意を四十七字の内にこめただけのもの、其苦心は我々の諒とする所であるけれども、音韻學上から見れば伊呂波は何等の價値も



ない。これに反して片假字は其字形こそ漢字の偏旁點劃を畧いただけのもので別段の工夫もないのであるけれども其排列の順序たる五十音圖は頗る學術的の者で充分注目する價がある。此五十音圖は吉備眞備が遣唐使に従つて彼地に留學した時に王化言といふ學者と共に定めた者であるといひ傳へて居るが又一には其頃同じく留學した僧侶が梵僧に就いて悉曇學を修め、それより工夫した者であるとの説もある。新井白石の如きもその東音譜に五十母字は悉曇に本づくと言つて居る。何れにしても我五十音圖と悉曇との關係は争ふべからざる者で雙方を較べて見れば同じ系統の者といふ事が直ぐ分るのみならず、我古音の事に就いて面白い材料も得らるゝのであるが、それは後段に譲る事とする。全體印度學の我國に傳はつたのは頗る古い事で、唐に留學した人々が彼地で印度の僧侶に教をうけたといふとはいふまでもなく、梵僧自ら奈良朝の頃渡來して居つたといふ事實もある。それは孝謙天皇天平勝寶五年(西曆七百三十五年)鑑眞和尚が唐より來朝して奈良の都に來た時に既にそれより二十五年も前から奈良に住んで居つた菩提といふ婆羅門僧に迎へられたといふとて、萬葉集の中にも婆羅門乃作有流小田平喫烏

險腫而幡幢爾居(フシマヘレケマホコノエニイ)といふ婆羅門僧を詠じた歌がある。それ故印度學の山來は頗る古い者で、その我國語音韻の研究に及ぼした影響は決して少くない。それから今一つは韻鏡である。これも支那の僧侶が印度音韻學の原則に倣ひ字音を表に作つた者で、凡そ唐宋の作であらうといふ説であるが、此韻鏡が我國に傳つて龜山院の文永年中(西曆千二百六十五年頃)より漸く研究し始められ、悉曇學と相待つて我國の音韻學上に偉大なる影響を及して居る。かの假字遣の復古説を唱へ喉音三行の別を立てた難波の契沖阿闍梨も、天竺の悉曇も僅に梵字を書くやうを習ひたるばかりと(通譯)はして居るが、師の學説は多く梵學に基いたもので、和字正濫抄の中にも悉曇の(通譯)が見えて居る。今此抄に依て其概畧をいうて見れば、凡そ人のものいふ時には喉の中に風があつて、此風が外の風を引いて丹田に下り腎水を打つて聲を起す。それが斷齒唇頂舌咽胸の七所にふれて喉内舌内唇内等に轉じ様々の聲となると先づかう聲音の起源を解いて、さてこの聲音を寫す梵字の學を悉曇といふのは成就といふ意味で、世間出世間一切の事皆これに依つて成就すといふ義である。其字母四十七字ある中で、初の十二字を摩多といふ。これは母の義で、我國語でいへ



ばアイウエオの五字である。次の三十五字を體文といふ、これは我國ではカサタナハマヤラフの九字にあたる。其中でアは口を開く最初の聲であつて、堅にはイウエオを生み横にはカサタナハマヤラフを生じ一切聲の初である。アの聲が舌に觸れて轉ずればイで、唇に觸れて轉ずればウである。イの音又舌に觸れてエとなり、ウの音又唇に觸れてオとなる。又アの聲少しく喉の外にあたり牙に觸れて出れば牙音のカで、舌の本并に齒に觸れて出るのが齒音のサで、舌の中程に觸れて齶を弾じて出るのがタ、舌の末で齶を弾ずるのがナである。サタナの三音は何れも舌に觸るゝ故にこれを舌音といふが、其中でナだけは鼻に通ほるから鼻音とも名づける。次に唇の内に觸れて軽く出るのがハで、唇の外に觸れて重く出るのがマである。次にヤラフの三音は口の中に滿ちて發する聲であるから遍口聲と名づける。其中ヤは喉音で舌音を兼ね、ラは舌の端を卷いて強く齶を弾じて出る舌音の極端である、フは喉音にして唇音を兼ね、唇の柔かに觸れて出る音であるとかういふ風に聲音の性質を分類して居る。今日から見れば不完全の所はあるが、當時の學者としては大なる進歩といはねばならぬ。

其後音韻研究の進むに連れて種々の學者が出た中にも、本居宣長はその字音假字用格にこれまで誤つて居たオラの所屬を正し、又『漢字三音考』地名字音轉用例などを著して發明するところ頗る多かつた。これに次いで義門は其『男信』に漢字の韻にシム<sup>シム</sup>の區別あるとを論じ、又『於乎輕重義』に於て更に宣長の説を敷衍した。其他太田全齋の『漢吳音圖』、白井寛蔭の『音韻假字用例』等數多の名著がある。此様に古人も既に音韻研究の忽せならぬことを認めて、その全力を注いで居る通り、一體言語は聲音の結合したものであるから、先づ聲音の原則に通じて然る後國語の問題に入るのが當然の順序である。こゝに所謂聲音學とは西洋より傳來の學術ではあるが、聲音の原則に古今東西の差別はない、それ故將來の學者は和漢諸學者の説に通ずると同時に歐米の新研究にも心を傾けて、更に一層發明するところがなくてはならぬ。

そも、聲音の感覺はどうして起るかといふに、先づ弾力性の物質が振動を始めると、其周圍の空氣が順々にこれを傳へてわれわれの耳に持つて來る、そこで耳の神經が刺激を受けて聲音の感覺が起るのである。空氣が振動を傳へるには常に



波の形をして進むから、これを音波と名づける。其音波の中に二種の區別が有つて、第一には波動の形規則正しきもの、即ち一定の時間毎に同一波動を繰り返すものと、第二には波動の形不規則なるものと、この二つである。第一の波動より起る音は所謂樂音で、即ち琴、笛等總て樂器の音がそれである。第二の波動より起るものは所謂騒音で、風聲、雷鳴などがそれである。さうして人類の聲音にはこの兩方ともある。空氣はこのやうに振動の媒介者たるのみではなく、極めて弾力性の多いものであるから、自ら振動の本體となることもある。それ故聲音と空氣とは離れ難い關係のものである。

さて樂音に於ては音波の高低によつて音の強弱が分れる、即ち音波が高ければ音は強く、低ければ弱い。又音波の速力で調子の高低が出来る。速力とは即ち一定の時間内に繰り返す同一波形の數で、其數の増す毎に調子は高くなり、減る毎に低くなる。假令また同じ強度で同じ調子の音でも、品物によつて違ひがある。これが所謂音色の差で、一體どんな音でも音叉のやうに一波動より成り立つものはなく、大抵は皆二波動以上の集合である。その中速力の一番遅いものを主音波と稱

へ、其他を副音波といふが、かの音色の差異はこの副音波の多少に起因するのである。さてこの副音波の存在は普通の耳には分らぬが、適當の裝置をすれば一々これ等を辨別することが出来るのみではない、任意にこれを増減すると即ち音色を思ふ儘に變ずる事も出来る。これは音に共鳴といふ性質があるからで、例へば主音波 A 副音波 a、b よりなる音波中に、主音波 a を有する物質を置けば副音波 a に感じて自然に鳴動し、主音波 b を有する物質を置けば副音波 b に感じる。要するに某音波中に某物質を置くと、若し其音波中の副音波の何れか此物質の主音波と同じときには、此物質は自然と鳴動を始めて副音波の數を増し、結極其音の音色を變へるのである。且物質に弾力性が多い程この共鳴性も多い、それ故空氣の様に弾力質のものはこれが一定の量を區劃して用ひると最も都合がよい。

人類の發聲機關にはちやうど右に述べたところが揃つて居る。全體がざつと三區に分れて居て、下部に呼吸機、中央に咽喉、上部に調聲管がある。呼吸機は肺臟と氣管とで、これは聲音の材料となる氣流を送る源と其通路とで、聲音其物とは直接の關係はない。咽喉は氣管の上にあつて、五箇の軟骨よりなる太い肉の管である。此



管の中部より稍上方に於て、肉質の左右兩壁より伸びて相逼り、中央に細き間隙を  
 殘して居る所がある。この肉塊が所謂聲帯で、其間隙が聲門である。發聲の際此  
 處までは何等の滯もなく來た空氣が、俄に其通路を失ひ強ひて其間隙より外部に  
 出でんとするとき、聲帯の筋肉に振動を起し、こゝに始めて聲音を生ずるのである。  
 調聲管とは聲帯より上部にありて空氣の滿ちたる總ての腔間をいふので、其中に  
 喉腔、鼻腔、口腔等の別があるが、就中口腔が最も重要なる位置を占めて居る。口腔  
 は固着したる上顎骨と、これと一定の角度を作りて運動する下顎骨と、齒及び唇等  
 とより取り圍まれたる一室であつて、其内に運動自在の舌がある。上顎骨の前半  
 部は硬口蓋と稱して硬く且不動であるが、其後半部は軟口蓋と稱へて軟く、其後端  
 には前後に運動する肉片が垂れて居る。これが懸壺垂といふもので、鼻腔、口腔間  
 の通路開閉の役を勤める。それで聲帯で出來た聲音が外氣に傳つて吾人の耳に  
 達する前には、是非ともこの調聲管を通過せねばならぬが、其中には空氣が滿ちて  
 居るのみならず、舌唇等の運動によつて其容積及び形狀が様々に變化するから、事  
 實上聲帯の上に無數の共鳴室が有つて聲音の音色を千變萬化する事となる。

かく無數に變はる音色が即ち所謂母音であつて、我國語に於てはア・イ・ウ・エ・オの五  
 であるけれども、實際上は共鳴室と同じく無數に多いのである。繰り返していへ  
 ば、聲帯の振動より起る聲は一つであつても、其通り路にある共鳴室の數が無數  
 であるから、理論上はその音色即ち所謂母音の數は無數である。しかし其無數の  
 ものを一々區別するわけにゆかぬから、其中から重なるものを撰んで代表者と定め  
 る。我國のア・イ・ウ・エ・オは即ちそれであるから、同じアの中にも様々の種類があつ  
 て決して一つと定まつたわけではない。エに近いアもあれば、オに近いアもある。  
 イに近いエもあれば、ウに近いオもある。かやうな有様で文字でこそア・イ・ウ・エ・オ  
 の五と定まつて居るが、其性質上からいふと何れも固定したものではない。然し  
 其中でも、とにかくこれと定めていひ得べきものはウとイとである。この二つは  
 母音の兩極端であつて、正反對の性質を備へて居る。即ち唇を左右に引き寄せて  
 偏圓にし、舌の前部を高く硬口蓋に近づけて聲帯の振動を受けたる氣息を通はせ  
 ば、これが即ち母音イである。此際舌と上顎との間隔の多少で幾種類もイが出來  
 る譯であるが、少しでも舌が上顎に觸れると、母音の性質は忽ち失せて子音iとな







と發音すると、イとウとは副となり、アが主となつて、ヤウの二音が出来る。それ故五十音中、ヤウの兩行は母音の二重に重なつたもので、其中に主従輕重の別があるのみであるから、普通これを半母音といふが理論上は重母音といふべきので、半母音とは其中の副位を占めて居る母音をいふべきである。以上述べた如く、母音は聲帯の振動を受けた氣息を調聲管の共鳴作用によつて調へたものであるが、子音の多くは全くこれと趣を異にして、氣息が何等の故障もなく聲門を通過して後、調聲管の某點に於て通路を狭められる時に摩擦するか、もしくはその通路の一時全く杜絶するのを破つて出る時に生ずるのである。これが所謂破裂音と摩擦音とであつて、その通路の狹窄もしくは閉塞する場處の異なるに連れ、唇音、齒音、顎音、喉音等の別を生ずるのである。

然しながらこの子音と母音との間にも、相互の性質を分有する中間性のもの、即ち流音ヲ行と鼻音ヲ行マ行とがある。流音は其名の如く、舌の先を上顎の前部に付けて中央に細き溝を作り、其間より母音性の氣息を流し出すのであつて、氣息が聲帯の振動を受くるとは母音的であるが、調聲管の通路が硬口蓋の前部に於て妨げ

られるとは子音トスル等と同一である。鼻音はまた口腔の或點を全く閉ぢ、懸雍垂を前に垂れて鼻腔の通路を開き、母音の場合に口腔より出るのと同様の氣息を鼻腔より出す者であつて、上下兩唇を閉せばマ行音となり、舌端を硬口蓋の前部に當て、路を塞げばナ行音となり、舌の後部を軟口蓋に接して路を閉づればng音となるのである。マ行ナ行に就いては別に論ずる必要もないが、ng音は我國語に存する音ではあるけれども、通例語頭のみにあつて語尾に来るとは無いのみならず、語頭に於ても通例ガ行と混同せられて居る。しかし此音が古くより存在して居たといふことは次の如き地名中の字音を見ても一般は分るのである。

愛宕	otagi	宕の古音	tang
相樂	sagara	相	sang
望多	maguta	望	mang
香山	kagyama	香	kyang

凡て何事にも過渡の時代がある如く、聲帯にも無聲の有様より有聲の有様に至る途中に、幾分か経過の状態がある。即ち聲帯が幾分か狭くなつたが、まだ振動を



起すのには充分でなく、僅かに摩擦を生じてかすれた音の出る時がある。これは如何なる母音の場合にも必ず其初に伴ふ現象であるが、この経過の時代のみを長くしたものが今日のハ行音である。即ち希臘人がアを $\alpha$ ハを $\alpha$ で示すが如く、ハはアの前提を長めたものに過ぎないのである。これは今日のハ行音の上のこと、その古音に就いては別に述べることがある。

さてハ行音は聲帯にて起る摩擦音であるが、これと同じ摩擦の現象を場處をかへて口腔内に起し、舌端を硬口蓋の前部、丁度 $n$ 音の位置に近づけて發すると、サ行音が出来る。この時の氣息は無論聲帯の振動を受けて居らぬものであるが、もしこの場合に聲帯の振動が同時に伴へば、濁音ザ行が出来る。清濁の區別は、獨この場合のみでなく、凡てを通じて聲帯振動の有無に起因するのである。

次に破裂音は前にも述べた如く、口腔内の某點に於て一時全く氣息の通路を塞ぎ、氣流の漲るを待ち俄にこれを開く時に出る音であるが、これも場處によつて色々種類が別れる。即ち舌の後部を軟口蓋に接し、丁度 $g$ 音の處で破裂させると、それがカ行音で、其場合に聲帯の振動が伴へば濁音ガ行となる。また舌端を軟口蓋の

前部に接し、丁度 $n$ などの位置で破裂せしめると齒音タ行で、それから濁音ダ行の出来ることも前と同様である。次に上下兩唇を閉ぢ、丁度 $m$ 音と同じ位置で破裂せしむると、これが清音バ行で、其濁音はバ行である。それ故從來バ行を半濁音と名づけて居るのはよろしくない。バ行音は純粹の清音で、其濁音がバ行である。それ故カガ、サザ、タダ等の關係は、 $ba$ の間には成立するけれども、 $pa$ の間には認めることが出来ないのである。かういふ理由から、ハ行の古音に就いて疑を挟む學者があるので、其説の概要を左に紹介せう。

外國人の研究に關する小話の中に書いて置いた彼のホフマン氏の文典(西曆一八六八年明治元年出版)には、ハ行の古音を $f$ とし、今日の $h$ 音はそれから轉訛したるもので、これと同様の變化は西班牙語にもあるといふことを論じ、日本では京都讃岐仙臺及び東北地方に $f$ の古音が残り、江戸附近は既に $h$ 音と變つて居るが、それも純粹の $h$ ではなく、例へば人といふ語の發音も  $hito$  と  $hito$  との間にさまよひ、殆ど  $sto$  と聞ゆるばかりで、數年日本に滞在して居つた露西亞の船長ゴロウキン (Golovkin) によつて、純粹のハ行音は遂に模し得なかつたとのことを述べて居る。それから氏がハ



行の古音を*f*と定めた理由として擧げて居る四個條を見るに、

(1) 日本の音韻學者は古くよりハ行音を唇音と定めて居ること。

(2) ハ行音を表はすために用ひられて居る漢字の原音は悉く*p*或は*f*であること。

(3) 和蘭陀及び英國語に於て、二母音の中間なる*f*が*v*或は*w*となる如く、日本のハ行音も例へば川顔などの如く二母音の中間に於てはフ行に變ずること。

(4) 十八世記の初半までに我國に渡來したホルトガルの宣教師其他の人例へば Caron (1639), Kaempfer (1691), Thunberg (1775), Titsingh (1780) 等はハ行音を表はすに *farina* (播磨) *fana* (花) *fofi* (堀) の如く悉く*f*音を用ひて居ること。

斯様にホフマンは明治の初年に於て早く既にハ行の古音に就いて論じて居るが、近來に至つて再びこの問題が國語學者の間に起つて來た。我々はハ行の古音は*p*であつて、後*f*時代を経て遂に*f*音となつたものと信じて居る。この問題に就いては色々の議論もあるが、今はたゞ其二三を附記するに止めて置く。

(1) 前に聲音學上より清濁の關係を論じた如く、濁音ハ行の清音は必ずハ行なる

こと。

(2) 今日の波行中にも殊にフにはなほ幾分か唇音の性質が残つて居ること。

(3) 古代地名中のハ行音を表はすに、入聲音*p*の漢字を用ひたること。例へば

愛甲	ayukaha	甲の韓音	kap
邑樂	oharagi	邑	enp
雜太	sahnda	雜	chapp
楯宿	ibusuki	楯	enp

(4) 日韓同系の語と比較するに、我のハ行音は彼に於て悉く*p*音となつて居ること。

云	ihu	口	ip
畑	hata	田	pat
針	hari	針	panār
買	kahu	價	kap
鳩	hato	鳩	piaruk



筆 *hude*  
降 *huru*

筆 *put*  
吹 *puu*

(5) 五十音圖と印度のデヴァナガリとを比較するに、我ハ行音は彼のP音に一致すること。即ちタナ、ハマ鼻音と唇音との相對する一組であつて、前者は齒音後者は唇音であるから、タナはtnにしてハマはpmなること

(6) 連聲の場合に例へば立派立法の如く字音にP音の復活する如く、國語にも思オカシ計何人の如くP音の現はるゝこと。

(7) 假字本末の附録に載せてある對馬人が朝鮮の諺文で書いた五十音圖には、諺文のP音を波行に當てゝ居ること。

以上の諸事實を合せて考へるに、ハ行の古音は確にP音の一種であつて、それがf音に和らげられ、更に今日のH音となつたものと考へられる。もとゞ唇音Pであるから、或場合にはfともなり、また連聲の時には原音Pを復活させるのである。これ一通り五十音圖中の各音の説明を終つたが、こゝにまだ一つ促音のはなしが残つて居る。促音は普通ツの字を片脇に寄せて書くから、やはり一の獨立音の

様に思はれるけれども、決してさうでなく、いはゞ一つの餘韻である。即ち母音の次に某破裂音が來る場合に、その準備として口腔の某處を閉ざす時、其關所より以内の調整管が聲帯の振動を受けた母音の氣流に對して共鳴作用を起す、これが即ち促音であるから、促音は母音より破裂音に移る中間の状態であつて、此二つの者が並ばなければ促音といふものもない。それ故母音及び破裂音の種類によつて、其中間の促音も變るわけである。

これまで述べた通り、各種の聲音は個々獨立して居るものではなく、多くは互に連絡して居る。即ち母音相互の間はいふまでもなく、母音の兩極端と子音とは其間髪を容れざるもので、子音の中にも發音の位置に依つて喉音、齒音、唇音、鼻音等それぞれ共通の性質を持つて居る。昔からタナ同等ハマ同等など唱へ又タナ舌ハ軽くマ重く唇の音などいふのは、即ちこれであつて、次の圖に示す音などは縦横相通するのである。

流	音
	r



	清音	濁音	鼻音
喉音	k	g	ng
齒音	t	d	n
唇音	p	b	m

此等及び其他の音の中には、單獨で變化するものと他の音に誘はれて相關的に變化する場合とがある。

(甲) 聲音の單獨に變化する場合。

(1) 母音相通の例。

蟹カニ { kani  
kane }  
兎ウサギ { usagi  
osagi }

現utsutsu { utsutsu  
osutsu }  
芋imo { imo  
umo }

吉野よしの { yosino  
yesinu }  
黄こがね { kogane  
kugane }  
木き { ki  
ke }

魚うゐ { uwo  
iwo }  
母屋もや { moyā  
myā }  
野の { no  
nu }

(2) ヲ行ナ行相通の例。

文ふみ { humi  
bun }  
浪なみ { namiha  
hanihaya }

紙かみ { kami  
kani (筋) }  
簀すい { suino  
suno }

速すみ { nira  
mira }

鴉みどり { nihodori  
mihodori }

(3) ヲ行マ行相通の例



半ヒナ シ { semi  
sen

竊ヒカ カ { hisoka  
misoka

腕ヒナ カ { takobura  
takomura

煙ケリ リ { kenuri  
keburi

暫シ シ { sibasi  
simasi

隱カ ナ { namaru  
nabaru

多タ カ { tamagaha  
tabagaha (多婆川)

上カ シ シ カ { kandachibe  
kandachime

(4) ナ行ラ行相通の例。

思オモ ヒ シ { heri  
hen

子コ ナ ラ { ra  
na

平ヘ シ シ { gurri  
gun

駿シ カ シ カ { suru  
sun

敦ツツ シ カ { tsunga  
tsunuga

播ハ シ カ { huri  
huru

(5) ナ行タ行相通の例

己オノ シ カ { odore  
odora

時トキ シ カ { sira  
sida

隔ヘ シ カ { hedatsu  
henaru

纏シ カ カ { wadaku  
wanaku

頂イ カ カ { itadaki  
itadaki

鍛カ シ カ { kennasi  
katasi

(乙) 聲音の相關的に變化する場合。  
(1) 母音の相互同化

糖タマ シ カ { tange  
toge

河カ シ カ { kahauchi  
kohochi







これとまた別に聲音の轉換及び脱落といふものがある。これは別に一定の法則といふものもなく、たゞ箇人の誤解または不注意に起因して遂に一般に及ぶものである。例へば

(1) 綴音の轉換する例。

赤肌 { akahada  
hadaka

茶釜 { cha-gama  
chamaga

釣瓶 { tsuru-be  
tsubure

晦 { tsu-gomori  
tsunogori

(2) 清濁の轉換する例。

唐黍 { tan-kibi  
tan-gimi

蒲葦 { kaba  
gama

前裁 { zen-sai  
sen-zai

里人 { sato-bito  
sado-lito

(3) 母音の脱落する例。

田面 { ta-no-omo  
tano-no

假庵 { kari-iho  
kari-ho

馬打 { uma-uchi  
mu-chi

天降 { ama-ori  
amo-ri

駒 { ko-uma  
ko-ma

陸奥 { michi-no-oku  
michi-no-ku

朝開 { asa-ake  
asa-ke

餉 { kare-ihhi  
kare-hi

(4) 音の脱落する例。

馬獵 { tori-gari  
to-gari

認 { nori-tamahu  
no-tamahu

探女 { saguri-me  
sagu-me

糶 { kari-to  
ka-to



拜 <sup>ワヨガム</sup>  
wogamu

佃 <sup>ツクニ</sup>  
tsukuni-ta

藥玉 <sup>クスニ</sup>  
kusu-dama

(5) 子音の脱落する例。

蔑 <sup>ナキガシロ</sup>  
nai-gasiro

肩 <sup>キスウ</sup>  
kisui

戲言 <sup>カハゴト</sup>  
kaha-goto

祝園 <sup>ハハニソノ</sup>  
hahni-sono

鳴 <sup>ナラシ</sup>  
nara-su

垣 <sup>ケキ</sup>  
keki

島 <sup>シマ</sup>  
shima

聲音に關する講義はまづこれで止めて置くが前にもいふ通りの次第で言語の研究には缺くべからざる知識であるから讀者はなほ進んで深く研究せられんことを希望する。

### 第三章 文字論

言語は我々人類の特有物で此上もない結構なものではあるがたゞ一つ著しい弱點がある。それは時間及び空間上の存在が極めて短いといふことで云ふまでもなく人間の記憶には一定の限度がある、假令どれ程長くとも僅五十年の一生に過ぎない、またどれ程の大聲でもその届く先には大抵の限があらう、獨逸の人オスカル氏の實驗によると、その最長距離は一キロメートルの四分の一といふことであるから、よしやどれ程の人間を集めて談すにしても、とても一時に數萬の多數に聞かせるとは出来ぬ。此一大弱點を補ふものが即ち文字で、我國の如きは言靈のさきはふ國言靈の佐くる國と語り繼いで、文字のない口傳の古を誇つて居る國柄であるが、それでもなほ文字の利便を感じたに相違ないといふとは、今更いふまでもなく、漢學の輸入後直ぐあのむづかしい文字を採用したのを見て分かるのである。此様に言語の死命を制する文字であるから、其發明もなかく容易でない。この廣い世界に古今東西を通じて重なる文字の發明は僅四ヶ所、メキシコ、アッカヂア、埃及



支那である。其中でも前の二つは微々たるもので、今日廣く行はれて居る文字の親たるものは、西に於ては埃及、東に於ては支那である。

埃及の文字は所謂ヒエログリフ(Hieroglyph)繪畫體に始まり、ヒエラチク(Hieratic)形象體より稍寫音體にまで進んだが、かのフェニシヤ(Phoenicia)人が埃及と通商の結果、此新利器を輸入して自己の手で遂に完全なる二十八の寫音文字を作つた。このフェニシヤ人は古代の有名な商業國民であつて、地中海の沿岸諸國と貿易をしたがために、その西班牙殖民地には早くより此文字を傳へた。それから又チエントン(Canton)人種、スカンデナヴィヤ(Scandinavia)人種が亞細亞方面より歐羅巴に向ふ途中で同じくこのフェニシヤ文字を學んで、それから出來たのがかのルーシ(Russia)文字である。然しながら最よく此文字を發達させたのは希臘で、希臘から羅馬に傳はつて、この希臘字と羅馬字とから今日歐羅巴各國の文字が出來たのである。また東の方面では、フェニシヤより亞刺比亞、土耳其を経て印度諸國に傳はつて、かのデバナリガリ(Devanagari)、ペーリー(Pali)等の諸文字を作り、またセミチック(Semitic)種族の中にも傳播して、就中そのシリヤ(Syria)文字は遠く亞細亞の東北部まで廣まつて、滿洲字

蒙古字の基となつた。かやうに其昔ナイル河畔に始まつた埃及文字は數千年の歴史を経て廣く五大洲に分布して居る。かの支那文字が東邦諸國の文字の親であるのと東西相對して實に文字中の覇者である。フェオルマンの集めた丈けれども、今日の世界に流布する文字の數は二百六十六種あるが、これらは概ね他の文字を借用したもので、その起源に溯れば前にいふ通り三四の源に歸するのである。

近世歐羅巴の學者が文字の發達を研究した結果を見るに、大凡三段の階級がある。即ち繪畫體、象形體、寫音體の三で、その中寫音體は又別に一字一語體、一字一綴體、一字一音體の三に分れる。今日行はるゝ各國文字の中には、既にこの進歩の諸階段を経たものと、まだその途中に彷徨うて居るものがある。さて繪畫體(Pictorial)は古の埃及文字、ヒエログリフ、また今日のメキシコ土人、亞米利加印度人などの間に、行はれて居る文字で、事柄の全體を粗末な畫で表はしたものである。勿論この繪畫には美的成分もなく、またもとより言語の聲音と何等の關係もない。たゞ思想の全體を表はすのみであるから、その各部分を分けて文法上の關係などを示めずことは出來ぬ。それ故極簡單な思想ならば、畫を一目して何人も其意を知ることの



便利がある例へば I II III V X の様な今なほ通用する一種の繪文字は、少しも其發音を表はさないうて、各國語に通用する便利があるけれども、思想が稍複雑して來ると、到底綿密にこれを描寫することが出來ぬ。

この繪畫文字の一段進んだものが即ち所謂象形文字 (Bildenschrift) である。これは繪畫文字の様に一幅の繪畫中に全體の思想を收めることはせず、其組織を一々別に引き離して、これを極簡単な殆ど符號といつてもよいほどの繪で示したものである。埃及のヒエラチックとか支那文字の多數とかはこれである。例へば兩足の形を書いて進行の意を示し、片手に劍、片手に楯の繪で戦争の意を表はすなどの類である。この象形文字は繪畫文字に比して稍進歩したに相違はないが、その寫すところは同じく思想であつて聲音でないから、やはり文字の第一義を缺いて居る。この象形體から寫音體に移る順序はかうである。同じ音で意味の違つた言葉はどここの國にもあるが、例へば x 音に a b c d の四義がある場合に、其中の一例へば a を表はす象形文字が共通の音を代表する様になり、かうしていつしか寫音體に進むのである。例へば支那で及吸汲級炭炭などは皆キフといふ音であるから、其中の一字「及」

にこの音を負はせ、吸汲級炭炭の場合には全くこれを寫音文字として用ひて居る。埃及では通例象形文字の表はして居る語の第一綴音が寫音文字に残り、後更に其一音のみとなつたので、例へば *metan* (鼻) *pet* (家) の兩象形體から遂に今日の *mp* が出來たのである。支那で發達した寫音文字は上に述べた通り、一文字で一語全體の音を表はすのであるから、これを一字一語體 (*vorschrift*) と名づける。この字體は支那の様に音韻組織が簡單で同音異義の語の多いところではまだ成り立ちもするけれども、さうでない國語ではとても複雑で使用に堪へない。それ故我國語を寫す場合には、自然これが一綴の音を寫す一字一綴體 (*silbenschrift*) となるのである。然し我國の聲音組織がもとく比較的簡單であるから、五十音丈けて濟みもしたが、今では現に不足を感じて居る。それ故もつと聲音の複雑した國語には此種の文字は適當でない、次に述べる朝鮮の諺文なども、漢字の流れを汲んで一綴を一字に組み立てるために、其組織は純然たるアルファベット體でありながら、活字などでは千數百の字母を作る不便がある。それでこれが更に進んで一字一音體 (*lautschrift*) 即ちアルファベット文字となるのである。然るに埃及では前にもいふ通り幸にも其







朝鮮の諺文は我日文の彼に傳はつたものといつて居るが、さうでないことは上に述べた諺文の構造に徴して分かるのである。恐らくこれは後世對馬或は九州邊を経て彼より我に傳はつたものと思はれる。それ故我國民が始めて文字の味を知つたのは漢字輸入の當時であるが、これは朝鮮といふ媒介者の手を経て來たもので、其朝鮮の語は我國語と同系であるから彼自ら支那文字を受取つた時、既に其應用について一種の便法を考へ出して居る、これが我萬葉假字の先驅ともいふべき吏道である。

支那では六書と唱へ文字の種類が六つある。其中象形といふのは日月馬魚車木などの様にものゝ形を象つたもの、指事といふのは木の下邊を標記して本の字を作るなど、會意といふのは日と木とを合せて東を作る類で、これ等はいづれも我等の所謂象形體に屬するものであるが諧聲といふものには始めて寫音體の分子が含まれて居る、即ち袋貨黨などの代は既に象形字ではなく、たゞタイといふ音のみを表はして居る。然しながら支那文字の發達は其本土に於てはこれ以上見ることが出來ない、これは支那語の性質の然らしむるところであらうけれども一體文字

史記  
子文

といふものは其發明の國に於て充分の發達はしにくいもので、却て他から借りた國がこれを進歩改良させるのが常である。文字を發明した國ではこれを無上に尊んで、人の作つたものではない神の賜であるといふ様に考へ、かのヒエログリフは神聖なる彫刻、デブナーガリーは神の都といふ義で、アッカディアの楔形文字もネボといふ神の賜であると語り傳へて居る。かういふ風であるから、其本國の人は文字に對して常に保守的の傾があるけれども、外國人の手に入るともはやさういふ考もなく全く一の道具と見做されるから、これに改良を加へることも自由に出来るのである、それ故に埃及の文字がフェニシヤでアルファベット體になつた様に、漢字も朝鮮人の手で一段進んだものとせられたのである。吏道の發明者は普通に新羅の薛聰(凡四曆六人)といはれて居るが、三國史記に聰性明銳生知道以方言讀九經義訓導後世至今學者宗之とあるばかりで、直に此人の創意とも判斷は出來ぬが、ともかく此時代に發達したもので、これは漢字を全く寫音的に使つて朝鮮語を寫したものである。然し彼國では史籍の湮滅が甚しくて古書の徵すべきものがないから、今日では僅に三國遺事の中に吏道で書いた數首の古謠を見るばかりである。



然し吏道は後世に至るまで胥吏の奏文官衙の文書等には形式的に用ひられ又漢文の捨假字にも残つて居る例へば

天地之間萬物之衆匪唯人伊最貴爲尼所貴乎人者醫以其有五倫也羅是故奴孟子伊曰父子有親爲旅君臣有義爲旅夫婦有別爲旅長幼有序爲旅朋友有信是羅爲時尼人而不知有五常則其違禽獸伊不遠矣里羅然則父慈子孝爲旅君義臣忠爲旅夫和婦順爲旅兄弟恭爲旅朋友伊輔仁然後匪沙方可謂之人矣里羅吏道が漢字の音訓を借りて朝鮮語を寫す様は全く我萬葉假字と同一である例へば

吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音  
吏道 和譯 發音 隱の音 伊の音 刀の音 萬の音 也の音

乙奴

カラ

en-llo

乙奴の音

爲羅

セヨ

ha-ra

爲の訓と羅の音

爲加尼

シタニ

ha-ke-ni

爲加の訓と尼の音

爲巨飛

シタヲ

ha-ke-ni

爲と飛との訓と巨の音

伊於乙

スルヲ

ie-en-llo

伊於乙の音

然るに漢字は字畫が多くて書くに不便であるからいつしか吏道の略體が出来た、これは又我國の片假字と同様に漢字の偏旁點畫を省いたもので頗るよく似て居る。

(一) 字音によるもの

(甲) 漢字の一部を取れるもの

片假字

吏道

發音

呂の上

面の上

hyen

保の下

代の傍

ho

奴の傍

古の下

ko



(乙) 漢字の全體を取れるもの

ハ 八の全體

五 五の全體

(二) 字訓によるもの

(甲) 漢字の一部を取れるもの

ト 止の上片

飛の上半

エ 江の傍

爲の上半

(乙) 漢字の全體をとれるもの

チ 千の全體

加 加の全體

殊に左記の數種は吏道片假字いづれも同一の漢字より作られて居る。

漢字 片假字 吏道 吏道の發音

伊 イ

乎 乎

於 オ

也 ヤ

奴 ヌ ノ  
多 タ タ  
爲 メ

これらはどうも偶然の符合とは思はれぬ、吏道の發明は新羅神文王の頃とすれば大凡西曆六百年代に當たる、さうして古事記の出來たのが和銅五年(西曆七百一十四年)であるから、吏道と萬葉假字片假字との間にはどうしても關係があるらしく思はれる。然しながら吏道といひ其略體といひ韓國に於ては充分の發達が出來なく、半途で萎縮してしまつた、これは朝鮮語の音韻が複雑で到底此等の姑息な文字では用ゐ立たぬからであつて、これがやがて諺文の發明を促したのである。然るに我國語は聲音の組織が簡單であるがために充分に寫綴體の假字が發達した。漢字輸入の當時まづこれを借りて表はす必要のあつたのは、固有名詞特に地名の様に思はれる、今日でも我々が Vladivostok (東方を占領せよの意を浦鹽と記し、Seppo (大きな洲)を札幌とかく様に昔の地名を漢字で表はしたので、はじめは主として其字音を用ひたものらしい、即ち



朝鮮音 朝鮮音

餘綾	餘	ye	綾	reung
美囊	美	mi	囊	hang
布當	布	pu	當	lang
伊香	伊	i	香	hyang
晏樂	晏	min	樂	rak
相樂	相	syang	樂	rak

其後追々と應用の範圍を廣めて、字音のみならず其訓をも借りて一音又は一綴音二綴音までも表はす様になり、例へば阿南丹・香衣・猿・越乞・夏借得・管石辛見などの外萬葉集には重石・西渡・冬風・喚鷄・馬聲・八十一・水葱・少熱など義訓戲書をも交へて縦横無盡にかき表はして居る。平假字はたゞ漢字を草體に書さくづしたまでのもので、別段變つたところはない。世に其作者を空海と稱するが、これも一人の發明といふよりは社會全般から自然に發達したものと思はれる、但し空海は書道の達人であるから、適當な字體を一定

したに違ひない、また和讀の意を今樣體に詠んだいろは歌の作者も此人であらう。片假字はまた平假字より餘程漢字と遠ざかつて居る、勿論字畫を略すことは支那にも古くからあつて、魔摩を广、歷雁を厂など用ひられて居るから敢て珍らしいことではないが、片假字に至つて充分此省略法が文字として獨立の體裁を具へて來た。世に其作者を吉備の眞備とする説があるが、これも信ずるに足りない。片假字に就いて最も注意すべきは其排列法たる五十音圖の組立てである、是は昔の悉曇學者が既に認めて居る通り、全く印度式のもので、恐らく其昔奈良朝の頃來朝して居つた梵僧などの傳へたものであらう。然るに五十音圖は徳川時代の國學者のために盛に國語の研究上に使用せられて、今日では我國の活語と此圖とは殆ど離すことの出來ない様になつた。もとより此圖が我國語の研究を補けたといふことは我々も認めるところで、此後とても永く教育上に用ひて便利なものと考えられるけれども、あまり此圖に依頼し過ぎる結果、我國語學上の現象はすべて此圖に依つて解けるなどと思ふのは間違である。五十音圖は國語の研究を助けたと同時に、また其進行を妨げたのも事實である。五十音圖は決して我國固有のものではな



次の圖に示す通りデヅナーガリーの排列順に依つて我國音を列べたものである。

音 子 音 母

	無 聲			有 聲		
	摩擦	破	裂	破	裂	鼻
喉	—	k カ	kh	g	gh	ñ
顎	s	c	ch	j	jh	ñ
舌	sh	t	th	ḍ	ḍh	ṇ
齒	s サ	t タ	th	d	dh	ṇ ナ
唇	—	p パ	ph	b	bh	m マ
半母音	ya ra la va ヤ ラ			va ヴ		

それ故其便利なところはどこまでも利用しなければならぬが、あまりこれに依頼

しすぎることは避けなければならぬ。このことは文法講義の上に於て最も重要なることであるから深く讀者の注意を促して置く。

これでさつと我國字の歴史及び其文字史上に於ける位置を述べたつもりであるが、其現狀及び將來はどうであらうか。我國語の音が五十音圖で網羅せられた時代には假字でも充分用に立つたらうが、國語の發達と共に聲音も次第に増加して來たから世々の人々は或は肩に二點を加へて濁音を示し、○點を添へて半濁音を表はし、促音にはッを拗音にはヤを片脇によせて書き、又語尾のㇿ音を記す爲に新にシ字を作りなどして其需要に應じて居たが斯の如き間に合せの様なとて果して限りない聲音の變遷に應じてゆけやうか。其上我國字は只この假字ばかりではなく、漢字が今日もまた其大半を占めて居るのである。而もそれが本國の支那とは違ひ音訓様々に用ひられて居るから其複雑さ加減は殆ど意外である例へば行といふ一字を品行行狀行燈正行行長行行手三行半と七種にも八種にも讀ませるのでその不便は一通りではない。こんな文字を持つて居る國民は果して幸福であらうか。これは學者といはず教育家といはず一般國民の熟考すべき問題である。



い、次の圖に示す通りデヅナーガリーの排列順に依つて我國音を列べたものである。

音 子 音 母

	無 聲		有 聲		
	摩擦	破 裂	破 裂	鼻	
喉	—	k カ	kh	g gh	ñ
顎	s	c	ch	j jh	ñ
舌	sh	i	th	ḍ ḍh	ṇ
齒	s サ	t タ	th	d dh	n ナ
唇	—	p パ	ph	b bh	m マ
半母音	ya ヤ		ra ラ	la ラ	va バ

それ故其便利なところはどこまでも利用しなければならぬが、あまりこれに依頼

しすぎることは避けなければならぬ、このことは文法講義の上に於て最も重要なことであるから、深く讀者の注意を促して置く。

これでざつと我國字の歴史及び其文字史上に於ける位置を述べたつもりであるが、其現状及び將來はどうであらうか。我國語の音が五十音圖で網羅せられた時代には、假字でも充分用に立つたらうが、國語の發達と共に聲音も次第に増加して來たから、世々の人々は或は肩に二點を加へて濁音を示し、○點を添へて半濁音を表はし、促音にはッを拗音にはヤを片脇によせて書き、又語尾の n 音を記す爲に新にン字を作りなどして其需要に應じて居たが、斯の如き間に合せの様なとて果して限らない聲音の變遷に應じてゆけやうか。其上我國字は只この假字ばかりではなく、漢字が今日もまだ其大半を占めて居るのである、而もそれが本國の支那とは違ひ音訓様々に用ひられて居るから、其複雑さ加減は殆ど意外である、例へば行といふ一字を品行カウキヤウ行狀アン行燈ツラ正行オコトイニク長行オコトイニク手クダ三行クダ半と七種にも八種にも讀ませるので、その不便は一通りではない。こんな文字を持つて居る國民は果して幸福であらうか。これは學者といはず、教育家といはず、一般國民の熟考すべき問題である。



ある。理論上から云へば文字は次の資格を具へた者が一番完全である。

一、獨立したる一音は必ず獨立したる一文字によりて表はさるべき事

二、同一文字をして別種の文字あるべからざる事

三、同音を表はす各種の文字あるべからざる事

四、綴字中に發音せられざる文字あるべからざる事

しかしまた習慣といふことも疎かにはならぬ。如何に善ければとて新しいものを採り使ひ馴れたのを捨て、仕舞ふといふことは感情の許さぬ點もあらう。けれども文字と國語とを同一視してはならぬ。國語は國民の精神ともいふべきものであるが、文字はいはゞ一の器械に過ぎないのであるから隨意にやりとりが出来る。アリヤン人種はセミック人種からセミック人種はチュラニヤン人種からいづれも文字をかりた、我國の如きも現に支那文字を使つて居るのである。これもまた充分考へるべきことで、國字を論ずるものはこれらの事情を斟酌した上、充分改良を加へてゆかねばならぬ。我輩は今國字改良について論ずべき場合でないから、参考のため大體の考を述べて置くばかりである。

## 單語論

語の分類法即ち所謂品詞或は語別の種類に就いては、前にもいうた通り學者によつて様々に説が分かれて居る。富士谷成章が名裝かざしあゆみの四種に大別して、その裝を事狀の二に分ち、更に事を事孔狀を在狀芝狀鋪狀に細別し、鈴木朗が體の語手爾波形狀の語作用の語の四種に分けたなどを重なるものとし、鶴峯戊申が和蘭陀文典を模して實體言代名活用言形容言接續言感動言等の名稱を用ひはじめてからこのがた歐羅巴風の分類法が多く世に行はるゝ様になつた。然しながら言語の性質がもと／＼彼我同一でない、彼は所謂屈折語(Inflexive)に屬し我は所謂加添語(Accumulative)であるから、例へば獨逸語などで名詞の語尾を變化させて表はす格を、我國語では別に手爾波といふものを添へて表はすのである。それ故徹頭徹尾彼の分類法に依るといふことは不可能で、我輩はやはり古人の説いて置いた通りに體言・用言・助辭の三大語別に分つのを最も我國語の性質に適當したものと考へる。體言といふのは獨立の意義を持つて居つて語尾の變化しないもの



即ち名詞代名詞の類を總括し、用言とは獨立の意味を備へてさうして語尾を活かせる語即ち動詞形容詞を指し、助辭とは以上の二種に含まれて居ない凡ての語を盡く網羅するもので、其中には語尾の活かぬものもまた活くものもあるが、何れも單獨では完全なる意義をもたぬ例へば助動詞<sup>テ</sup>爾乎<sup>カ</sup>波接尾語等である。我國語の性質に鑑みて先づ語別の根本を以上の三種に定めて置いて、其中をまたそれの官能に應じて細別するのであるが、一體分類といふものは動植物の別にせよ雌雄の別にせよ凡て絶對的の者ではない、或點に於て必ず相互の接觸する所がある、況んや品詞の細別の如き人爲の分類に於ては、時に應じ見方により此ともなり彼ともなる事のあるは怪しむに足らぬ。今日といふ語は、無論名詞に違ひないが、時としては副詞に用ひられることもあり、年月日の代理をする點からは代名詞と見られぬ事もない。此等のことは學者が豫め心得て置いて、あまり一方にのみ執着してはならぬ。今一つの注意は文法上の術語であるが、これも成たけは從來慣用のものを用ひて、新規のものは萬止を得ない場合の外は避けたいと考へる。文法家がめい／＼己が意に任せて新しい術語を作り出しては、頗る統一を欠いて不

便である、假令多少は不穩當でも慣用の語を使つた方が寧ろ宜しい、既に久しく用ひ馴れたものは、不適當であらうとも深く人の腦裡に浸み込んで居るから、成たけ保存して置く方が便利であらう。英語の *case* (格) といふ語も語源は墮落拉丁語 *casus* の義で、凡て格は主格 (*nominative*) の墮落したものと考へて居つた時代の術語が今なほ用ひられて居るのである。

## 第一章 體言論

### 第一節 名詞

事物形状等一切の名を表はす語を名詞と名づける。其中に色々の區別があつて、<sup>春夏</sup>の様な形のないのを無形名詞、<sup>草木</sup>の様な形のあるのを有形名詞といひ、<sup>日本</sup>、<sup>東京</sup>など一事一物のみに限るものを固有名詞といひ、<sup>國町</sup>など廣く其類の一般に通ずるものを普通名詞と名づける。其他<sup>月花</sup>などの如く生來名詞のもの、外に、他の品詞から轉來した名詞が三種類程ある。

(一) 動詞の連用言より名詞となるもの。此類の名詞は多くイ音で終り、またニ音



て終るものもある。後世では多く生來の名詞の様になり變はつたものゝ外はあまり用ひられて居らぬが、古くは自由自在に動詞から作つたものと見えて、見が欲し無禮面幣利無久御執弓御佩刀君が行きけ長になりぬなど上古に溯るに従つて其例が夥しく見えるので、これは動詞の名詞法として特に注意すべきことである。今日普通に行はれて居る名詞の中で、此類に屬する二三を挙げると

商 (商ふ)

使 (使ふ)

網 (編む)

帯 (帯ぶ)

待 (候ふ)

謠 (歌ふ)

件 (下る)

唾 (唾吐く)

因縁 (言はる)

裕 (合はす)

(二) 從來カ行の延言と唱へて居る在久乎好叙の在らく取久乎不知の取らく居久乃奥香母不知の居らくなどで遊ばく忍ばく散らく問はまく願はく恐らくなど古くは一般の動詞に通じて用ひられた形である。後世はあまり行はれな

くなつたが曰く思はくなどは今も普通に用ひられて居る。

(三) 苦しみ樂しみ悲しみ安みなど形容詞活用中のミ形名詞法で、これも古代に溯るほど其用例が多い。甘んじて安んじて重んじて輕んじてなどは、いづれも甘み安み重み輕みといふ名詞法と爲といふ動詞との結び付いたもので、此等はいづれ後々用言の條で詳しく論ずることとせう。

以上述べたのはいづれも我國固有の語であるが、此他東西兩洋の諸外國から輸入せられた外來の名詞も少くない。普通に行はれる漢語はいふまでもなく、ソクヒ(續飯)フナ(鮒魚)など音訓の交はれるもの、フシン(普請)アンドン(行燈)など宋音の傳はれるもの、其他オッコフ(億劫)サコ(雜喉)サジ(茶匙)コウタツ(公道)着物など上品にて華美ならぬをいふ、ゼニ(錢)など一見漢語とは思はれぬものもあり、文(文)紙(紙)簡(簡)などの様に全く日本語化したものもある。佛教の普及につれては旦那(Danna)水(水)爾伽(爾伽)などの梵語が傳はり殊に近世諸外國と交通の結果著しく外來語が増加した。其中で餘程日本語化したものを少し次に挙げやう。

多葉粉(葡萄牙語 tabaco)

羅紗(葡萄牙語 seda)



- ぼうふら(葡萄牙語 abobora)
- かすていら(葡萄牙語 Castella)
- 金米糖(葡萄牙語 confeitos)
- 有平糖(葡萄牙語 alfelou)
- 合羽(葡萄牙語 capa)
- 緞紗(葡萄牙語 saraca)
- 莫大小(西班牙語 medias)
- 南瓜(印度の地名 Cambaja)
- 棧留縞(印度の地名 São Thomé)
- 辨柄縞(印度の地名 Bengala)

などなか／＼夥しいものである。此等の外來語を古今に通じて漏なく集むることとは外來語辭書(Fremdwörterbuch)のなすべき仕事で、こゝにはたゞ其一端を擧ぐればかりである。

二個以上の名詞が集まつて新たに一の名詞を作ることがある、これを複合名詞とす。例へば

- 月夜ツキヨ 松風マツカゼ 地謡チヤウ 琴歌コトウタ 賣買ウライ
- 貸借カシカケ 春霞ハルカスミ

此等は一目して其組織を知ることが出来るが、前にもいうた通り我國語は所謂加添語で、二語以上連合する場合には其原義の忘れられることが屢々あるから、次に

擧げる様な語は、もと／＼複合名詞であるにも係らず、通例一語と考へられて居る。例へば

- 苔(木毛) コケ 蠟(唐壘) カラスミ 木耳(木海月) キノコ 鼎(金鍋) カマド
- 朔(月立) ツキイダテ 晦(月籠) ツキカケ 向身交(背交の對) ムカシカウ 蛤(濱栗) ハマグリ

其外戸の複合名詞には、密港門(外門の罌、木の複合詞には、杉、麥、椴、柿、竹、薄、萩、萩、椿、檜など)籠の複合名詞には、箱籠、籠、旅籠など、所の複合名詞には、都其所、此所、因所、在所など、其他東風、疾風、旋風、荒風などのチ、シなどは風の古語で、前目邊、後尻邊、古往邊などのへは邊の義で、此類の例は限りなく多い。

さて我國語の名詞には歐羅巴各國語の様に性の區別がない。強ひて男女雌雄の區別を立つる場合には、メー、ラ、メー、コイ、モー、セなどを語の上下に添へてこれを表はすのである。例へば

- オノコ (男子) ヤモヲ (鰥夫) メカツラ (楓)
- メノコ (女子) ヤモメ (寡婦) ラカツラ (桂)
- ムスコ (息子) フトコ (男) セヒト (兄)



(ムス・メ) (娘)

(ヲト・メ) (少女)

(イモ・ヒト) (妹)

ヒ・コ (彦)  
ヒ・メ (姫)

ムカヒ・コ (婿)  
ムカヒ・メ (嫡妻)

此等はまだ其複合詞たることが大方は分かるが、ヲ・ヒ(甥)・メ・ヒ(姪)・シ・カ(牡鹿)・メ・カ(牝鹿)の類に至つては、ちよつと其組織を見分けることがむづかしい。

【備考】性の區別は朝鮮語でも略々これと同様で、國語のイモセ(妹背)を彼語では *musin* といひ、牝鶏を *musin*、牡鶏を *musin* など、稱へて兩性を分かつて居る。

名詞の數もまた歐羅巴各國語の様に嚴重には區別をせぬ、たゞ山々日々人々など、同じ語を重ねて多數を示すことがあるが、此重語法は動詞形容詞副詞などにも雖、追追聲伊繼伊繼余會比互煙立龍黒々遠々山々入々折々の如く語勞を強めるために用ひられて居る、其上日々月々などは、日毎に月毎にの義で、普通の複數ではない。今一つのラドモ、タチ、バラなどの接尾語を添へて、子等子供公達殿原など、用ひることがある。然し一體に複數の觀念が甚だ薄弱で、一人を指して媿婦等妹等などといふのは古言の常で、後世でも身共子供などは單數に用ひ、まだ其上に身共等子供達などといふことがある。

### 第二節 代名詞

文章中に一々名詞を繰り返す煩を避けるためこれに代用する語が代名詞で、其中に人代名詞・疑問代名詞・指示代名詞等の細別がある。人代名詞は人名に代へるもので、話手と相手方と其以外のものによつて一人稱・二人稱・三人稱とに分ける。指示代名詞は事物を指し示すもので、其距離の遠近によつて近稱・中稱・遠稱の區別がある。また以上の二種について疑問又は不定の意を表はすものを疑問代名詞といふ。

人	代名	名詞
第一人称	あ、	わ、
第二人称	な、	われ
第三人称	か、	あ、
疑問代名詞	た、	あれ







るのも極めて不便なことであるが、用ふべきところに故らこれを省いて文義を不明瞭にするのは一層不都合のこと、いはねばならぬ。要するに我國語の代名詞は大に整理して改良を加へる必要がある。

代名詞も亦名詞と同様にワレワレ(我々)オノオノ(各)ソレソレ(其其)タレソレ(誰某)カレコレ(彼此)など、語を重ね、又ラ、ド、モ、タ、チ等の接尾語を添へて複数の意を表はすが、これも單複の別が甚だ薄弱で、身共等吾々共など、あるが上に添へてもなほ複数の意が充分でない、しかしこれは彼我ともに成るべく直接に指さぬことを敬語と考へた爲めであらう。

### 第三節 數詞

數詞とは事物の數を表はす語であつて、我國固有の語と漢語から借りたものと兩種ある。其中漢語より借りたものは一十百千より萬億兆に至るまで、大小あらゆる數を簡易に表はすことが出来るため、廣く一般に用ひられ、我國固有のものは却て其使用の區域が狭い。これはかの支那數詞が古く我國に傳はつた爲めに其發

達を妨げられたからで

ひとつ	ふたつ	みつ	よつ	いつ	むつ
ななつ	やふつ	ここのつ	とを	はたち	みそぢ
よそぢ	いそぢ	むそぢ	ななそぢ	やそぢ	ここのそぢ
も	ち	いほつ	よろづ		

などあるが、其中ひとつよりとをまでを除いた他は用法が極めて不規則で、はたち(二十歳)はつか(二十日)みそぢ(三十歳)みそか(三十日)の如きは多く歳日に限られて居る。ひとつよりここのつまでのつは簡幾個などのつに同じの義ある接尾語で十や廿といふついのつはたちのちみそぢのぢよろづのづちのぢなどいづれもこれと同語である、それ故數詞の本體はこのつを除いたもので、例へば

一重	二人	三日月	四方八方	七草	十夜
八十島	三十日	千種	百歳		

など用ひられて居る。それで萩生徂徠は南留別志に二つは一つの轉、六つは三つの轉、八つは四つの轉ならんと説明を試みて居るが、チェンバレーン氏は更に一步を



進めて、日本數詞の構造を次の如き母音變化に版して居る。

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
hitō	huta	mi	yo	i-tsu	mu	lo-wo	ya		

これはなほ研究すべき問題であるが、兄(ani)姉(ane)の如き男女の性も、浸(simi)染(so)の如き自他の別も、母音の轉換で示して居る例もあるからこれも面白い觀察と思ふ。

固有の數詞で十以上の數へ方が充分でないことは、十一日をトラカアマリヒトヒ、二十二日をハツカアマリフツカノヒなど、廻り遠く一々名詞を繰り返して用ひるのを見ても分かる。其他五(イッヂイカ)十(イカ)百(ヒャク)代(ダイ)などのイは至極曖昧で、つもれる年をしろればいつのむつになりになりとあるなども五十六と三十との兩様に解せられて甚だ不明瞭である。

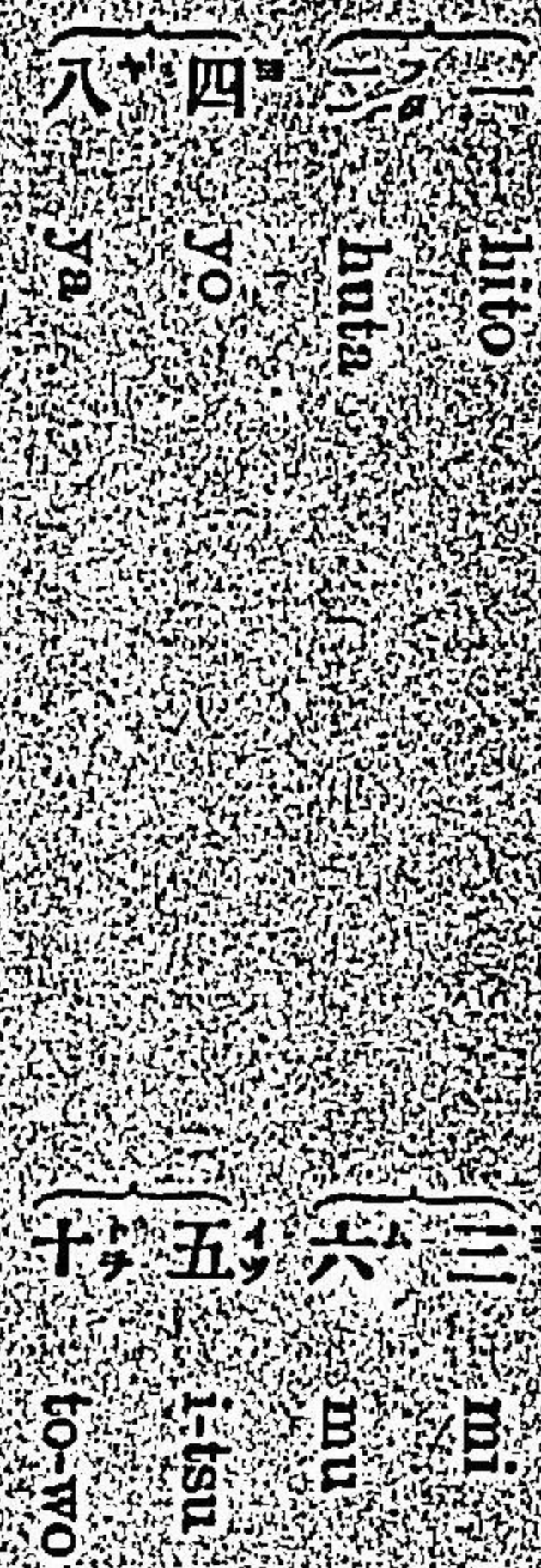
### 第二章 用言論

用言は一に活語とも稱へ動詞形容詞の總稱である。全體我國語の形容詞は歐洲各國語で所謂形容詞 (adjective) なるものとは大に其趣を異にして居る。西洋の動詞 (verb) は我國語の動詞と同じ様に動作または形狀に就いて斷定を下すもので、語の中では一番重要なものであるから verb (拉丁語 verbum より出づ、語の義といふ名稱も出來た譯であるが、形容詞に至ってはたゞ名詞の意義を限定するに過ぎない。然るに我國語の形容詞は語尾の活用することから文中の地位に至るまで動詞と同等で根本に於て差別が無い。それ故昔の學者も作用言と形狀言とを合せて用言とし、體言助辭と對立せしめたのである。其上に自分は動詞活用と形容詞活用との間に密接の關係があつて根本は一つに違ないと信じ又これを證明せうと思つて居るのであるから、今假に動詞形容詞と項を分けて論ずるけれども、この二つは決して別々のものでないといふことを豫め注意して置く。

#### 第一節 動詞



進めて日本數詞の構造を次の如き母音變化に版して居る。



これはなほ研究すべき問題であるが兄(ani)姉(ane)の如き男女の性も浸(simu)染(su)の如き自他の別も母音の轉換で示して居る例もあるからこれも面白い観察と思ふ。

固有の數詞で十以上の數へ方が充分でないことは十一日とトヲカアマリロトト二十三日とハツカアマリフツカノヒなど廻り遠く一々名詞を繰り返して用ひるのを見て分かる。其他五十日五百代などのイは至極曖昧でつゞける年とするればいつのむつになりにけりであるなども五十六と三十との兩様に解せられて甚だ不明瞭である。

## 第二章 用言論

用言は一に活語とも稱へ動詞形容詞の總稱である。全體我國語の形容詞は歐洲各國語で所謂形容詞(adjective)なるものとは大に其趣を異にして居る西洋の動詞(verb)は我國語の動詞と同じ様に動作または形狀に就いて斷定を下すもので語の中では一番重要なものであるからverb(拉丁語 verbumより出づ)詞の義といふ名稱も出來た譯であるが形容詞に至ってはたゞ名詞の意義を限定するに過ぎない。然るに我國語の形容詞は語尾の活用することから文中の地位に至るまで動詞と同等で根本に於て差別が無い。それ故昔の學者も作用言と形狀言とを合せて用言とし體言助辭と對立せしめたのである。其上に自分は動詞活用と形容詞活用との間に密接の關係があつて根本は一つに違ないと信じ又これを證明せうと思つて居るのであるから今假に動詞形容詞と項を分けて論ずるけれどもこの二つは決して別々のものでないといふことを豫め注意して置く。

### 第一節 動詞



動詞は凡て事物の動作及び状態について断定を下す語で例へば鳥が鳴く夜が明  
くの鳴く明くなどの類である。

動詞をその性質によつて自動詞他動詞の二つに分ける。他動詞とは動作が發動  
の主體から直接に他の事物に及ぶものをいふので例へば飯を食ふ子を産むの食  
ふ産むなどの類である。自動詞とはその反對に動作が直接に他の事物に及ばぬ  
もので例へば雨が降る日が照るの降る照るの類である。それ故他動詞には常に  
動作の及ぶべき事物が必要なのでこれを他動詞の目的と稱へ豆爾波のをが必ず  
これに伴ふのである。例へば水を飲む手を打つ水を手をの類である。然し自  
動詞の中にも其動作に標準を必要とするものがある例へば顔が鏡に映る人が家  
に住むの鏡に家などの類である。また他動詞にもこれと同じ様に其目的の外  
別に標準を持つことがある。例へば車に荷物を載す友に書を寄すの車に友にな  
どの類である。それからまた自動詞ともなり他動詞ともなる語もあるので例へ  
ば氣を張る氣が張る戸が開く戸を開く風が吹く笛を吹く水を増す水が増すの張  
る開く吹く増すの類である。然しながら兵役を終りて二階に馳せ上るなどの様

に自動詞と他動詞とを誤用することは注意して避けなければならぬ。

動詞を其組織の上から本來の動詞及び轉來の動詞の二つに分ける。本來の動詞  
とは例へば押す打つなどの如く生れつきからの動詞である。轉來の動詞とは他  
の品詞より轉じて來た者で例へば安しより休む、悪しより惡む、悔しより悔む、烈し  
より勵む、憂しより倦む、痛しより痛む、惜しより惜むなどの様に、形容詞から轉じた  
ものもあれば肩く綱く宿る類る應る數ふ影る藥す獨言ふ假言つの際に肩綱宿頭  
應數影藥獨言假言などの名詞から轉じて來たものもありまた裝束く彩色く猿樂  
く高じる下卑る力むの様に裝束彩色猿樂高下卑力などの漢語から轉したるもの  
もある。また名詞と同じ様に動詞にも他の語と複合して出來たものがある。其  
中に一見して組織の分かるものもあるが、又ちよつと構造の分り兼ねるものも  
ある例へば存す困す開すなどは存困檢などの字音に爲の結び付いたもので欲す  
重す安すなどは四段言欲の名詞法欲形容詞重し安しの名詞法重み安みと爲との  
複合で蕪る試むなどは既に其活用も變つて居るが名詞香心と動詞居見との複合  
したものである。



動詞は其意義を様々に云ひ表はさんがため語尾を變化させる、これを活用と稱へ其變化しない部分を語根と名づける。然しながらこの變化する部分即ち語尾と變化せざる部分即ち語根との區別はこれを假字で書くのと羅馬字で書くのとして違つて來る、此等はいづれ追々述べるところに依つて自然分かるであらうが、自分は國語の動詞語根は母音で終るものも幾分があるが、其多數は子音で終ると考へる。従來この動詞活用を左の如く正格五種變格四種に分けこれを五十音圖に配當して説明して居る。

正格	變格	格	語根	將然言	連用言	終止言	連體言	已然言	命令言
四段活用	下二段活用	上二段活用	(行) ゆ yuk-	か a	き i	く u	く u	け e	け e
	(得) え er-	(生) き ikir-	か a	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo
	え e	き i	き i	き i	く u	く u	くれ e	きよ ikyo	えよ eyo

格 變 格

格	變格	格	格	變格	格
上行變格	下行變格	佐行變格	加行變格	下一段活用	上二段活用
(有) あ ar-	(往) い in-	(爲) せ ser-	(來) こ kor-	(蹴) け ke-	(見) み mir-
ら a	な a	せ se	こ ko	け ke	み mi
り i	に i	し si	き ki	け ke	み mi
り i	ぬ u	す su	く ku	ける u	みる u
る u	ぬる uru	する u	くる u	ける u	みる u
れ e	ぬる ure	すれ e	くれ e	けれ e	みれ e
れ e	ぬ e	せよ seyo	こよ koyo	けよ keyo	みよ miyo



右の中最も多数なのが四段活用で、殆ど動詞總數の過半を占めて居る。これに次ぐのが下二段活用で、これも可なり多い。上二段活用は前二者に比べると遙かに少なく、上一段活用は僅に十數語、下一段に至つてはたゞ蹴カの一語である、然かもこれは古く蹴カ散カ蹴カ鞠カなど、和行下二段若しくは也、行下二段に活いたものが約まつて出來た者といふ事である。かやうに中昔の國語では四段活用が最も優勢で二段活用これに次ぎ一段言は最も微々たる者であるがこの勢力の消長は時代によつて同じくない。即ち古くは四段言の勢力がなほ一層盛んであつたと見えて隠カる。馳ハす、寄ハす、隔ハつ、止ハむ、恐ハる、觸ハるなどの二段言も皆四段に活いて居る。其後下二段が稍活氣を帯びて來て、一時は同じ語を四段下二段兩様に活かせた時代もあつたが、遂に四段と相並んで動詞活用中の多數を占める様になつたのである。然るに近世に至つてはこの形勢が一變して一段活用が俄に頭角を現はし、生カ起カ落カ過カ延カなどの上二段言得カ任カ越カ捨カ載カ兼カ勤カなどの下二段言はいつれも上一段下一段に活く様になつて來た。動詞の活用といふ者は其語生得の者ではなく、時に應じて遷り變はるものであるといふことはこれを見ても分かるのである。

然しながら、或時代の言語を論ずる場合に其時代の語法を守らねばならぬことは勿論であるから、中古の語法を標準とする我文語に於て上二段の慎カ奈カ行カ變格の死を四段に活かせるなどは間違である。然しまた前に述べた複合動詞の場合に例へば願カるカ鑑カるカ惟カるカなどは、まだもとの動詞見ると同じ一段活用であるが、試カるカ後カ見カるカなどは上二段にも活き、改カむカ新カ見カ眺カむカ長カ見カ極カむカ際カ見カなどの類は其語原を離れて下二段活用となつて居るのである。なほ一つ注意して置くことは、前にもいうた通り活用は語尾の母音を變ずるのであるから、五十音圖でいへば、必ず同行中の音に變はる譯である。それ故、悔カゆカ覺カゆカ老カゆカ報カゆカ消カゆカ殖カゆカ冷カゆカ榮カゆカ絶カゆカ越カゆカ生カゆカなど、也行に活くものを悔カひカてカ覺カへカてカ老カひカてカ報カひカてカ消カへカてカ殖カへカてカ冷カへカてカ榮カへカてカ絶カへカてカ越カへカてカ生カへカてカなど、波行に活かせ、又代ふ、教カふカ堪カふカ添カふカ扣カふカ支カふカ強カふカなど、波行に活くを代カゆカ教カゆカ堪カゆカ添カゆカ扣カゆカ支カゆカ強カゆカなど、也行に活かせることのない様にせねばならぬ。變格の諸活用も亦多くは一語のみで其他にあるのは概してこれが複合した者である。即ち佐行には爲カと坐カすと二があるが、坐カすカの方は大坐カ坐カの約まつた者で、そ



の坐すは四段言である。さうして論ず解す無す與すなどの類はみな爲の複合詞である。奈行變格にも往ぬと死ぬとの兩語があるけれども、これも死ぬの方はシ「イヌ」といふ複合詞で、別にシヌ(弑)といふ語もある。良行變格も有り居り侍り在りの四語あるが居りは居あり侍りは這あり在りは在ありの約て結局有の「一語に飯する。其他然り善かれ悪かれなど何れもみな有の複合詞である。變格は此様に其數も少なく又活用にも例へば加行變格に獨りオ列音があるとかまた助動詞の接續上にもまゝ特例が有るとかて甚だ不規則である。然しながらこれだけで變格を正格の崩れたものと考へるのは宜しくない。丁度田舎言葉の中に存外古言の残つて居ると同じ様に變格の中にも活用の古格を保存して居るのである。

全體活用言の研究が稍其形をなし始めたのは新しい事である。谷川士清加茂眞淵富士谷成章本居宣長等の諸大家皆何れも研究する所はあつたけれども纏つた者となつて世に出たのは春庭の入衝が始めて、義門其他の學者がこれを受けて細い點には修正を加へたが、其の根底は今日に至るまで毫も動かぬのである。眞

にその國語學上に於ける偉大なる功績はいつの世までも傳はるべき者であるがたゞ此等諸先輩の研究中に千慮の一失ともいふべきは動詞の研究を五十音圖の上立てられた事である、即ちいはゞ人爲の製作物たる五十音圖を我國語の語法と結びつけやうとせられた事である。なるほど五十音圖は音韻學上の原則に基づいて作つたものであるから、或點までこれを利用する事は便利でもあり、また研究の助けにもなるに違ひなからうがあくまでこの音圖を楯として活用を解釋せうといふのは大なる誤りである。五十音圖が古の學者を啓發した功勞は消すべからざるものであるけれども、一方から見れば、またこれがため我國語の研究がどれ程妨げられたか知れないのである。例へば四段二段一段などの命名も其一つで、四段は行カキクケ押サシスセと同行中の四音に活くからそれてよいが、他の二段一段をもこれと同じ型に入れやうとするから、自然受ケケククレ見ミミミルミルミレのルレを度外視せねばならぬ様になるのである。これは既に諸先輩の論じて居らるゝこととて、大槻博士もこのルレのなきは四段と良行のみで、一段の如きは終止法にもルがあるからこれを活用の中に數へぬはよろしくないといはれ



また故草野文學士は下二段に附くるルレ一段に附けるルレと別けて一段言の方は語尾の活用で二段言の方はテニとの連絡上添へたるまでの補助であるから此兩者を混同したのは古人の手落ちてあると論ぜられて居る。このルレに關する自分の考は後段に述べる積であるが兎に角斯様に古の學者がルレを曲解するに至つたのは全く五十音圖に束縛せられたからである。さて正格變格九種の活用が最初から我國語に備はつて居たものか又はその中のどれかゞ元で他はそれより分れて出たものかといふ事に就いては随分議論がある。前にもいつた通り古くは四段活用の勢力が盛て後に下二段の語も當時は多く四段に活いたなどの關係から我國の學者中にもこれを根本の活用と認めて居る人が多い又外國の研究者の意見も概ねこれと一致して居る。今参考のため一通り此等の學説を擧げて置く。外人の中で早くこの動詞活用について研究をした人はかのホフマン氏で矢張四段言を基として他はこれに有爲得などの動詞が複合したものと考へて居つたらしく次の如き諸例が見えて居る。

sak-aru 盛  
 noku 退  
 nok-oru 殘  
 agu 揚  
 ag-aru 上  
 mi-ru 見  
 mi-su 見  
 masu 勝  
 tsuku 盡  
 tsuk-aru 疲  
 ho-ru 乘  
 ho-ru 載  
 na-ru 成  
 na-su 爲

ホフマン氏の説を受け繼いだのが例のアムトン氏で氏はまづ正格動詞を次の三種類に分け活用の古體を其中の第一種と定めて次の如く論じて居る。

第一類	第二類	第三類	語根	副詞	終止	連體	打消	過去
(貸) kashi	(食) tabe	(見) mi	kashi	tabe	kasu	kasa	kasu	kase
(出) deki	(來) deki	(見) mi	deki	tabu	deku	dekuru	deki	dekuve
			mi	miru	miru	miru	mi	miru



以上の中第三類に属する諸動詞はいづれもみな一綴であるからこれを第一類の様に變化させると語根の形を損ふ恐がある。それ故r音を挿んでこれを防いだので、其の他の單綴動詞根も略これと同様の方法で活用して居る。第二類にある得の如きも其一つで、第三類の僅か變つたものに過ぎないのである。さうして第二類中エ語尾のものは悉くこの得の活用と一致して居るからこれを得の複合動詞と見てもよからう、例へば見と得とが複合して見ゆとなる類である。又二類中イ語尾のものは比較的少數で、然かも往々第一類に活用することがあるから恐らく第一類から轉して來たものか或は得と類似の單綴動詞が結び付いたものであらう。それ故結局第一類が根元(original)で、第二類は轉來(Derivative)活用、第三類は單綴(monosyllabic)活用ともいふべきものであるといふのが氏の意見の大要である。

チェンバレン氏の説はその琉球語研究(Essay in aid of grammar and dictionary of the Luchuan language.)に見えて居る。氏は動詞の活用を左の

第一類	(取) tora	tori	toru	toru	tore
-----	----------	------	------	------	------

第二類	(出) ide	ide	idsu	idsuru	idsure
第三類	(落) otsi	otsi	otsu	otsuru	otsure
第四類	(見) mi	mi	miru	miru	miru

四類に分けてさうしてこれを琉球語の動詞と比較した結果、次の様に論じて居る。

(一) 琉球語の動詞活用はたゞ一種類ぎりであるが、日本の動詞活用も始は一つで段々後に分かれたのであらう。

(二) 日本語と琉球語との活用を比較して見るに、次の如く

	日本語				琉球語	
第一類	終止	toru		huyung		
	連體	toru		huyuru		
第二類	打消	toranu		turang		
	終止	idzu		njyung		
第二類	連體	idsuru		njyuru		



類 四 第			類 三 第			類
打	連	終	打	連	終	打
消	體	止	消	體	止	消
minu	minu	minu	oehinu	otsuru	otsu	idenn
mirang	nuru	ning	nirang	nirru	ning	nirang

琉球語では打消法の語尾が常にアであり、また終止法と連體法とは常に形が變つて居るが、日本語では第一類の打消法のみがア語尾で終止法と連體法との形の同じくないのは第二類第三類に限られて居る。それで此二條件を合せて備へて居る者は奈行變格の往ぬであるから、これが根本の活用であらう。

(三) 第二類は得の複合より出來た轉來活用で、これは所相などの場合に必要上複合する外に、觸る、隠る、恐る、垂るなどの様に、故なくして第一類より第二類に移る例

もあり、また重ぬー重なる、助くー助かる、止むー止まるの如く有得が第一類動詞に結び付いて自他を分つて居ると思はれるものもある。

(四) 第三類動詞の由來は聊か不明であるが、これも多分第二類の變種であらう。生く、和く、紅葉づなどは第一類から第三類に移つた實例である。

(五) 第四類は少數の單綴動詞で、既にアストン氏の説かれた通りの理由で特別の活用をして居るものであらう。たゞ見るといふ一語だけは、丁度試む(心見)が第三類に活いて居る通り琉球語にもムムルに相當する形か見えて居るから、或は第三類の轉じたものではないかとも思はれる。かやうにアストン氏が最古の活用を四段と定めたものをチェンペン氏は奈行變格に改めたのである。

前にもいうた通り、我國にも古くから四段を活用の根本と論じた學者は少なくない。今草野氏の文典中から此等の學說を擧げて見ると、

(一) 隠る、忘る、馳す、寄す、隔つ、給ふ、板ふ、止む、恐る、避く、觸るなどは、いづれも始めは四段で後に下二段となつて居る。

(二) 所相のル、ラル、敬相のス、サスも後には下二段であるが、萬葉時代にはいづれも四



段に活いて居る。

- (三) 四段言の浮く釣るの使役相が浮かす釣らすであるから、遅らす替はす、遅らす暮らすなどの本言遅る替ふ、遅る暮るなども本来は四段であるべき等である。
- (四) 四段言笑むの勢相が笑まるであるから、定まるの本言定むももとは四段であつたであらう。

斯様に、國語の動詞活用はもと一種類で、今の四段活用がこの古體に近いものであるといふことについては、内外の學者の意見がほと一致して居る。我輩も大體に於てこれに同意するが多少考の違ふところもあるから、一通りこれを述べることとする。

(一) 良行變格の有は事物の存在を示す最も重要な動詞で、特に我國語に於ては動詞助動詞の諸活用中に様々應用せられて居るから、實に動詞研究の起點であつて、これさへ充分に會得すれば其の他は自然に明らかになると考へる。さて有は良行變格とはいふものゝ終止法がリとあるばかりで、其他は全く四段活用と同一である。ことに終止法がイ音で終るのはたゞこの一動詞あるのみで、其

上ラムナリ、ミン等に接續する場合には變じてルとなるなどを合せて考へるに、もとは四段に活いたといふことが殆ど疑ない。

(二) 有は自動に屬する動詞で、其他動といふべきは下二段活用なる得である。このアリとウとはまるで別々の様に見えるが、その實同一の動詞根が母音を變へて、自他を別つて居るのである。母音の變化で語の意味を潤色し或は變更することとは敢て珍しくない例へば

侵 <small>シム</small>	simu	荒 <small>ササ</small>	susamu
染 <small>ソム</small>	somu	進 <small>ススム</small>	susumu
溜 <small>タマリ</small>	tanaru	剪 <small>キル</small>	kiru
積 <small>ツム</small>	tsumoru	伐 <small>キル</small>	koru
此 <small>コ</small>	ko	一 <small>ヒト</small>	hito
彼 <small>カ</small>	ka	直 <small>ヒタ</small>	hita
細 <small>コホシ</small>	kohosi	兄 <small>アニ</small>	ani
戀 <small>コヒシ</small>	kohisi	姉 <small>アネ</small>	ane

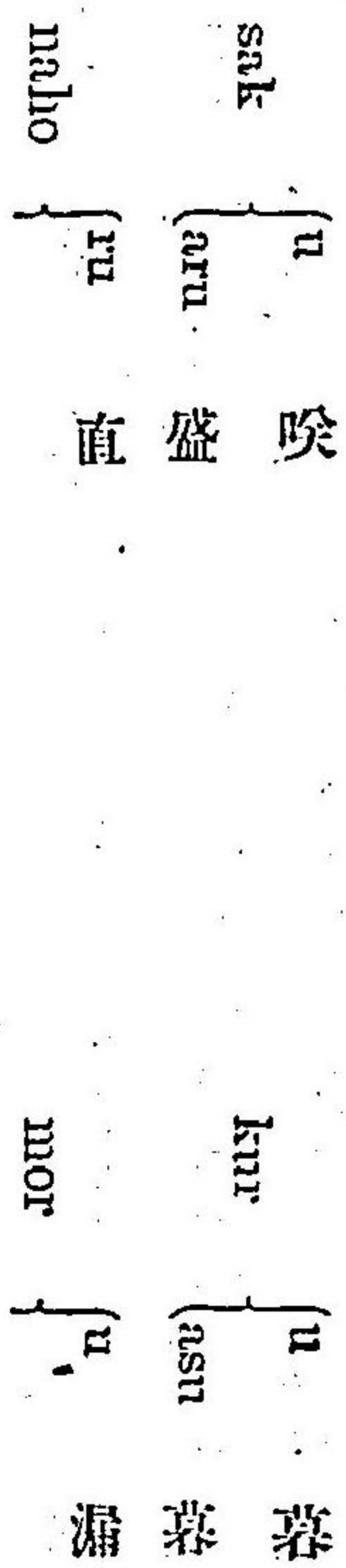


の類で、有得もまた其一例であるが、これは得の所相を見れば分る。全體所相は動詞根に有の複合したもので、例へば押さるは *osa-iru* であるから、得の所相得らるは *osa-ru* でなければならぬ。又所謂加行の延言を見ても押す—押さく (*osa-iru*) 得—得らく (*osa-ru*) となるから、我輩は從來助動詞の一部分と認められて居るこの *r* 音を語根の中に數へて、*er* を得の語根と主張するのである。それで得の活用は元來有と同じく良行變格であるべき筈を、我國語に普通の聲音變化即ち大分をオホイタ、烏網をトアミ、藥玉をクスダマ、並てをナメテ、雖惜をヲシケドモなどいふと同じく、活用の一部分に於て *r* 音を失ひ、且母音を *u* に變じて遂に別種の活用となつたのである。斯様にして出來た有得といふ一對の自動詞他動詞が他の動詞根に結び付いて自他を分つ場合が甚だ多い、其實例は後段に譲ることとする。

(三) かの佐行變格の爲も確に其中の一つで、下二段と違ふところは連用の語尾 *i* 音ばかりであるが、これも禁止の副詞勿が付くとナセとなり、過去の助動詞に接續する場合にもセシセシカとなるから、もと下二段に活いたといふことは疑ない。

かういふ風に下二段活用の動詞が段々殖えて來るに連れて、所謂類推の作用で他の活用からこれに移るものが出來て來る。この類推作用は國語の變遷上重大なる勢力のあるもので、例へば東より南、左より右、假字より眞名、また影より影、咄よりうねる、宿より宿、雲より曇、肩より肩、枕より枕、などの出來たのはいづれも他に類推した形である。それと同じ風に、もと四段の忘る、馳す、隠る、止む、恐る(妹は忘らじ、馳させて、深山がくり、花の盛をと、みかぬ、人の耳におそり) などが類推の作用で下二段となつたのである。忘の如きは書紀には和須選士(四)古事記には和須禮士(下二)と見えて居るので、此他にも同時代に四段下二段の兩様に活いた例が少くなさう。

(四) 以上述べた有得爲の三動詞は他の動詞根に結び付いて自他等の別を立て、居る場合が甚だ多し。





直	馳	走	換	代	冷	冷	隱	隱
(su)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)
	u	u	u	u	u	u	u	u
	iru	iru	aru	aru	asu	asu	aku	aku
漏	落	落	流	流	悟	諭	懲	懲
(asu)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)	(su)
	u	u	u	u	u	u	u	u
	osu	osu	aga	aga	sato	sato	io	io

此等の動詞は、もとの有得爲と活用が變つて居るけれども、複合の場合に原活用を失ふことは珍しくない例へば、佐行變格の爲も無くす(醸す(醸す)となれば四段で、良行變格有居も薫る(香居る)御座る居るとなれば或は四段或は一段となり、一段活用の見も試む(試む)恨む(恨む)などの場合には四段であるから、有得爲が複合して活用を變じたとして更に怪むことはなす。

五) 上二段活用はアストン氏がこれを下二段活用と合せて彼の所謂第二類として居る通り、下二段活用の稍變じたもので、其一種と認めて差支ない。即ち冷ゆ(冷ゆ)燃ゆ(燃ゆ)などは何れも下二段と上二段と兩方の用例がある。それでやはり下二段と同じ様に有文は得の複合した者と見えて、其所相及び加行延言には閉ぢらる(閉ぢらる)起らる(起らる)恥づらる(恥づらる)落つらる(落つらる)などの如く語根に「音」が復活する。其上帶ぶ學ぶ(學ぶ)生く(生く)などは四段上二段兩様の例あべる玉玉を佩ぶるもの文の道を學びず道(道)を學ぶることをさくにいつまで生かん命(命)ぞ死なんと思へど生くる人ぞいとつらさや(つらさや)などの類がある。また否む(否む)荒む(荒む)疎む(疎む)赤らむ(赤らむ)悲む(悲む)など麻行の場合には四段で、これが否ぶ(否ぶ)荒ぶ(荒ぶ)疎ぶ(疎ぶ)などの婆行に轉ずると上二段になる事も注目すべき事である。

六) 上一段活用は見る(見る)乾る(乾る)着る(着る)表る(表る)等僅に十數語のみであるが、これも前にいうたと同じ様に有の複合したもので、其原形は所相及び加行延言の見らる(見らる)見らく(見らく)着らる(着らる)着らく(着らく)などに現はれるのみならず、

「乾る」 hi-ru 「着る」 ki-ru



干す *ho-su*  
見ゆ *mi-yu*  
見る *mi-ru*

着す *ki-su*  
似る *ni-ru*  
似す *ni-su*

などの例に依つてもその複合詞たることは明瞭である。ことに見ると同義の守るが四段であることは、一層此間の消息を明にするものである。

(七) 加行變格の來は、僅に一語である上に、其活用も甚だ不規則である。しかしこれも矢張有の複合したものらしく、所相には來らる (*ko-aru*)、加行延言には來らく (*ku-aku*) と何れも語根に *i* 音を復活して居る。其上、使の來ればなど四段に用ひられた例もある。

(八) 之を要するに、四段活用と奈行變格とを除きては、悉く皆良行變格の有か又はそれより轉じた得爲などの複合したものである。

(九) それで良行變格自らも四段の一種と見るべきものであるから、結局後に残るのは四段と奈行變格との二つであるが、自分は矢張キニバレン氏の説の如く奈行變格の方を古活用と信するのである。なほ詳しくは後節に述べるとする。

さて前に述べた通り、動詞活用の語尾變化を五十音圖に配當して六段に別け、普通これを將然言連用言終止言連體言已然言命令言と呼び來つて居るが、これは大體義門の命令法に據つたもので、師の活語指南には將然言連用言截斷言連體言已然言希求言とあつたのを、黒川真頼翁が截斷言を終止言と改められ、希求言が西洋文典の譯語の命令言と代つたのである。此他まだ斷止段終止言(續詞段連體言)などの名稱もあるが、餘り普通でない、大槻博士は此等の名目に言の字を當てたのを、妥當でないとしてこれを法と名づけ、又將然を不定法と改め別に中止名詞の二法を加へられた。自分は、大體これに據るつもりである。

第一段將然言は君や來ん我や行かんまつとし聞かば今かへり來んなどの如く、動詞豆爾乎波に連なつて未來の意を表はすからの名目であるが、然しこの段はこれのみでなく、神代も聞かず花も匂はぬ山里色こそ見えね尋ぬる人もあらじと思へばなど、助動詞に連なつて打消の意をも示めすのである。それ故、未來及び打消の意は助動詞及び豆爾波にあつて、活用の中に備つて居るのでないから、大槻博士はこれを不定法と名づけられたのである。この法で任せず聞かせて恨みんを







祈る祈らすなどの様に種々の作用をして居るから連用法の如き一時的の接續を許さないものであらう。それ故よく心得あり規則を定めあり文章を習ひあり是非を辨へあり金を預けありなどは正しくない。

第二活用と形は同じで動詞の活を云ひ据ゑて名詞とするのが名詞法である。このことは既に名詞の條で述べた通り昔は見が見が欲し君が行きなどと大方の動詞から隨意に作つたものらしく見えるが後世では其用法が甚だ狭くなつて既に全く名詞化したものゝ外はあまり多く用ひられない。例へば

霧(キリ)溢(トケ)る 切(キ)る 限(カキ)る 遮(サヘ)る などのさる 唾(ツバ)吐(ク) 裕(ホト)合(マ)す 包(ツツ)包(ミ) 盥(ウラ)手(テ)洗(ス)ふ 帶(オビ)帯(ビ)ぶ 網(アミ)編(ミ)む 頼(タノ)頼(ノ)む 連(ツル)連(ル)る 然しながら他の語と複合して名詞法となる場合は今も少なくない。例へば 手打(テウチ) 手活(テカク) 掃溜(ハキダマ) 男勝(オトコカト) 雲行(クモイ) 出入(イデデ) 犬死(イヌシ) 讀賣(ヨミウ) 立聞(タテキ) 脊比(セヒ)

第三段は終止法でこれは動作を其儘に云ひきつて一文の終とする法である。例へば九重の内に射る我身世に舊る居れば又居る幡幢に居りなどの類である。然るに今日の口語で連體法が終止法を同化した結果文章語に於て稍もすればこの法に誤用がある。例へば鳥岩の上に集り居るなどの類で特に一音の動詞來爲得などにはこの誤が多い。

第四段は連體法でこれは名詞の上に付いて其意義を限定する法である。例へば 待つ人。 鳴く鹿。 聞く時。 流る川。 春の着る霞。 この法にもまた四段言と他の活用との混同より起る誤用が多い。例へば打ちよす浪忍ぶことゆき過ぐ人燃ゆ思廢る身などはいづれも寄する忍ぶる過ぐる燃ゆる廢るゝとしなければならぬ。 この語はまた其下に名詞のあるものと見て其儘で名詞法の如く用ひらるゝ場合がある。例へば習ふより慣れ問ふに落ちず語るに落つ散るを惜しまぬ人しなければなどの類である。

普通この連體法は時の考をはなれて用ひられて居る。生れ落つる日世を捨つる人などは強ひていはゞ現在であらうけれどもまづは時の觀念を離れた使ひ方である。然しながらこの法にはもと未來の意が含まれて居りはせぬかと思はれる



節もある。終止法を受ける疑問のやと連體法を受ける疑問のかとを比べて見てもこの疑は起るありやなしやあるかなさか来や〜来るか〜などの間にはどうしても時の違があるに相違ない。なほ詳しくは後節にゆづることとする。

第五段は已然言でこれは動作の終りたることを表はす法であつて通例はどども等の豆爾波と連なつて飲めども盡きず月見れば千々にものこそ悲しけれなど、用ひらるゝが已然の意は豆爾波とは關係なく此法自らの中にある。故に

いさなとり海やしにする山や死にする死ぬれこそ海は潮干て山は枯れすれ

古の人になれあれやさなみの古き都を見ればかなしき

の如く豆爾波のつかぬものもある。

第六段は命令法でこれはもと下知希求の名もある通り動作を命じ又は希ひ求むる意を表はす法で四段と良行變格との二活用即ち諸活用中最も古體に近いと思はるゝものに於ては已然言と同形である。例へば

郭公ゆめ心あれ。沖に居れ浪。ちりぬとも香をだに殘せ。

こゝの限りは我宿になけ。

もと〜命令は動作の完成即ち過去たるべきことを求むるものであるから已然言を以てこれを表はし語勢に依つて區分を立てたものと思はれる。それ故聲絶えずなげや鶯などの様に感動のやが添うて居るものもある。

四段良行變格以外には我に教へよ君をとよめよ雲の通路吹きとちよなどいづれもよが添うて居るがこれももとは感動詞であると思えて古くはこのよのないものもある。例へばふじの根のならぬ思ひにもえはも雨ぞふるてふかへりこ吾香はやく手にするなどの類である。

從來の文法家が動詞の語尾活用と認めて居るものは以上の六段であるが既に前にも述べた通りこれは古人が五十音圖に束縛せられて常に動詞活用の語尾を同行中の音に限つたからのごとてこの外これまで他の説明法をとつて居た中に其實動詞活用の中に加へなければならぬものが凡三種ある。勿論これは己の私見て尙充分に調査を重ねた上でなければ確定することが出来ないが用言の研究上に重大の關係を及ぼす事柄であるから大體の意見だけを述べて置く。

(一)く形の副詞法



これは從來音の延びたるものと考へられて居る所謂舒言又は延言の一種で例へば戀ふ見る云ふ恐るの延びた戀ふらく見らく白はく恐らくの類であるが故なく聲音の延びるといふことは甚だ可笑なわけでこれは活用を五十音中の同行音に限るといふ根本的の誤解に基いた苦しい解釋といはねばならぬ。このくは其性質上形容詞活用の副詞法例へば善く悪しくなどのくと少しも違はぬ。例へば止むこともなく戀ふらくもへばの類である。

(二)く形の名詞法

これも前の副詞法と同じ様にこれまで延言と考へられて居つたもので例へば梅の花ちらくはいづこ見らく少なくこふらくのおほき在らくを好みぞ取らくを知らにの類で其他 待たく 居らく 行かく 爲らく 來らく 老らく 隠らく など古く其用例が甚だ多いのみならず今日も曰はく願はく思はく思へらく聞ならくの類は普通に用ひられて居る。このくの語原についてはなほ研究を要するけれども形容詞の廣く白くから廣く

白くといふ動詞の出來ると同様に萎ふ攻む泣くに對して蹇ぐ闊ぐ歎くといふ動詞のあるのを見ても形容詞のくと同じ性質の古活用が動詞にもあつたといふことが分かるのである。

nahu 萎      semu 攻      naku 泣  
nahu-gu 蹇      seme-gu 闊      nage-ku 歎

其外名詞より轉じて動詞となるものゝ中肩ぐ枕ぐ襪ぐ襪ぐ網ぐ網ぐなどのくは肩枕、襪羅網といふ名詞が類推上上記のく形の動詞となつたものと思はれる。

(三)み形の名詞法

これは主として形容詞活用にある名詞法例へば善み安み重みなどの類で動詞にはあまり多く其用例を見出さぬけれども然し老いみ幼けみなどのみはこれである。形容詞の安み痛み勵みより安む痛む勵むといふ動詞の出來る様に垣く垂る裂くなどに對して圍む弛む裂む石根さくみて踏みとほりなどといふ。

kaku 垣      tami 垂      saku 裂  
kaku-mu 圍      tami-mu 弛      saku-mu 裂



動詞のあることも亦これらの諸動詞にもとみ形名詞法のあつたことを推定せしめるのである。

さて前にも一寸いた通り形容詞にもこのく形み形の兩名詞法があつてそれが轉じて動詞となる場合が少なくない例へば。淺しより嘲む嘲く忙しより勇む急ぐ緩しより緩む緩く廣しより廣む廣ぐの類である。

asa-si	淺	iso-si	忙	nuru-si	緩
asa-nu	嘲	isa-nu	勇	nuru-nu	緩
asa-ku	嘲	iso-gu	急	nuru-gu	緩

然るに動詞の場合にもこれと同様に、加行と麻行に活く一對のものが少くない。例へば壽ぐ譽む颯く臨む禁ぐ絡む歩む歩ぐ挾む挾ぐなどの類である。

ho	壽	ku	颯	kara	禁
ho-gu	壽	ho-ku	颯	kara-gu	禁
ho-nu	譽	ho-ku	臨	kara-nu	絡
ayn	歩	hass	挾		
ayn-gu	歩	hass-gu	挾		
ayn-nu	歩	hass-nu	挾		

此等から推して考ても、動詞活用の古體には形容詞と同様にくみの兩名詞法のあつたことが知られる。

所謂波行の延言、即ち祈ぐを願ふ向くを向ふ取るを捕ふなどいふ類はこのみ形名詞法と直接關係するところがあるから序に説明して置かう。既に前章にも述べた通り、波行の古音はpでp mの兩音は近いから昔の學者もハマ同等と唱へて此兩行は相通ずることが多い。それでかのみ形の名詞法も浮む浮ぶ荒む荒ぶ樂む樂ぶなどの様に波行に轉ずることがある。これから考へると笑ふ嘘く(wara-hu-we-ha-gu)なども本來はみ形く形の兩名詞法から出来た一對の動詞であつたのが麻行より波行に轉じて稍其形を改めたものと思はれる。別に笑む(wa-mu)といふ動詞があることも参考になる。

それ故次に擧げる様な所謂波行の延言は、畢竟み形の名詞法から出来た動詞の更に轉じたものと考へられる。

uku	浮	sumu	住
uku-gu	浮	sumu-gu	住
uku-nu	浮	sumu-nu	住



hakaru	謀	tsukuru	日造
hakara-hu	計	tsukuro-hu	日造
teru	照	tsugu	績
tera-hu	街	tsuga-hu	番
iku	生	tataku	擲
iko-hu	息	tataka-hu	戰
arasu	荒	oloru	劣
araso-hu	爭	oloro-hu	衰
usu	打	siru	知
uta-hu	歌	sira-bu	調
huru	振	manu	眞似
hara-hu	拂	mana-bu	學
osu	押	manu	慣
oso-hu	變	manu-hu	習

### 第二節 形容詞

形容詞は凡て事物の形狀性質等について説明を下す語で、例へば月清し風寒し心樂し行正しなどの類である。我國の形容詞は既に前にも述べた通り語尾の活用から文中の位置に至るまで動詞と變るところがない。それ故西洋の形容詞の様にたゞ名詞の意義を限定するものとは其區域がよほど廣い。勿論我國の形容詞にも例へば

大空	珍人	吉詞	生善肉
荒妙	痛手	青柳	近隣
長夜	淺瀬	深緑	味酒
空言	惜工	荒玉	大路

の様に名詞の上に立つてたゞ其義を限定する類もあるが然しこれは極の少部分で形容詞の常體とはいはれぬ。普通の形容詞は語尾の活用することは無論箇々の語根に至つても動詞と關係して居るものが多い。例へば



us-n	tsuk-n	失	付
usu-si	chika-si	薄	近
nob-n	as-n	延	淡
naho-si	asa-si	直	淺
ar-n	kur-n	荒	暮
ara-si	kur-si	荒	黑
har-n	nue-si	晴	嬉
hiro-si	wara-hu	廣	笑
ak-n	koh-n	明	戀
aka-si	koha-si	赤	細

などの類もどちらかの一方から轉したものではなく其根底に共同の點があるらしい。殊に次の如き諸例をよくよく玩味したならば動詞形容詞の活用間に複雑した關係のあることが幾分か分るであらう。

/se-si 狭 /iso-si 勤

se-ku	isa-mu	塞	勇
se-mu	iso-gu	攻	急
sema-ru	isoga-si	逼	忙
sema-si	isogaha-si	狭	忙
na	ita-si	勿	痛
ni	ita-mu	不	痛
nu	ito-hu	不	厭
ne	itaha-ru	不	勞
nasi	itaha-si	無	勞

さて形容詞には重し輕し樂し苦しなど本來より形容詞たるものゝ外他の品詞から轉じて來たものが少くない。例へば黄色よりさいるし物よりものゝし神よりかうくし雄よりをくし女よりめくし白よりしらくしなどの様に名詞から轉じて來たものもありまた骨よりこらくし美よりびよし餘處よりよそくし執念よりしふねし仰よりぎやうくし勞よりらうくしなど漢語から轉じたもの



のもあり、また恨むよりうちめし、急ぐよりいそがし、戀ふよりこひし、願ふよりねがはし、病むよりやまし、恐るよりおそろし、頼むよりたのもじなど、動詞から轉じて來たものもある。其外、動詞の場合と同じ様に、他の語と復合して例へば香と細とよりかぐはし、心と細とよりうるはし、逸と著しとよりいちじるし、逸と早しとよりいちはやしなどが出来る。

形容詞活用を左表の如く二種類に分ち、これを志幾活用、志志幾活用と名づける。

	語根	副詞法	終止法	連體法	已然法
志幾活用	(善)yo-	く	し	き	けれ
志志幾活用	(惡)あ-	しく	し	しき	しけれ
		-siku	-si	-siki	-sikere

志幾活用は例へば輕し、重し、遠し、廣し、善し、樂し、正し、美し、烈し、親し、戀し、嬉し、の類である。志志幾活用にははれ、く、し、晴々、いまいまし、思々、うや

く、し、恭はかく、し、抄々、くどく、し、吹々などの疊語が多い。志幾活用の語根を重ねてもかるく、し、輕々、おもく、し、重々、とほく、し、遠々、ひろく、し、廣々、にがく、し、苦々などの、志志幾活用になるのである。

動詞の活用は五十音の同行音のみに限られるが、形容詞の活用には加佐兩行の音を交へて居るとして、これを兩活用の差別とする論者もあるが、我輩は決してさうでないと思ふ。既に前にも述べた通り、動詞活用にも丁度形容詞と同じ様に、形副詞法み形の名詞法があつてもとく、形容詞活用は動詞活用の一部分であつたらしく、それが後にだんく、分離して遂に今日の形となつたのであるから、形容詞活用の成立は比較的其時代が新らしい。それ故に、れといふ活用などは奈良朝の頃にはなかつたので、そのかゝりも例へば衣こそ二重もよき、ちのが妻こそとてめづらしきもはら今こそ戀はすべなきなど、いづれもきしきを以て結んで居る。其他大さし、如し、静けしなども、ちほさけれごとけれし、づけれなど、は活かぬ。善けく、愛けく、安けく、寒けくなどにも、けし、けきの活はなく、また蓋しく、若しく、但し、少し、斯くなど、形は形容詞活用の様で、其活の欠けて居るものも多いのである。



志幾活用と志志幾活用との差はたゞ其終止法だけで、志志幾活用の終止法にしの一番を添へたならば、全く志幾活用と同じになる。それ故往々悪し、賤し、美し、貧ししなどの誤用がある。しるしの如きもいちじるしとなれば多く志志幾活用に誤られる。其他かたくなし、頑、こきたし(許多)の如きはかたくなかたくなしく、こきたくも、こきたしきなど、兩様に活かせた例がある。それで形容詞三種の活用は根本的に違つたものか、或は同原より別れたものであるかといふことに就いて、これまで色々の説があるけれども、まだ一定しては居らぬ。

全體形容詞は動詞に比べると、其研究が甚だ發達して居らぬ。富士谷成章はあゆみ抄の初に装の圖をあげて、これを事と状とに分ち、その状をまた在状態鋪狀の三つに別けて居る。しかしその装抄といふものが世に出て居らぬから、詳しく説は知ることが出来ぬ。春庭の八衢も形容詞のことには充分説き及んで居らぬが、義門はよほどこの方面を調べたものと見えて、その山口菜などには有益なる研究が少くない。それから後種々の學者が色々の意見を發表したが、専らこの問題のみを論じたのは、權田直助の形状言八衢である。翁は形状言活用の一種なること

を主張した論者で、その意見はさつとかうである。

(一) 淺み、淺み、淺げ、嬉み、嬉み、嬉げなどの如く、げ、みは本言を受けるものであるから、語根はあさうれしてあるといふこと。

(二) 終止言は同音の重なるのを思つて、うれしとのみいふが、口語ではあさうれしといふ故、あさしに對してはうれしといふ形のあることが分る。結局し、と重なるのを避けただけ、形状言二種の活用は全く同一であるといふこと。

(三) 凡て活用言の活はいづれも一音であるのに、形状言のみしくしきと二音たるべき筈はないといふこと。

(四) 淺瀬、深淵、細女、空煙などの如く、名詞と複合するには、いづれも本言よりすべきものであるから、くはし、ひなしの語根たるとはこれにても明かであるといふこと。

(五) 形状言には次の六種あること。(一) 有りの類、(二) 淺し、深しの類、(三) 嬉し、悲しの類、(四) 遠々しの類、(五) 静けく、明けく、の類、(六) 露けく、の類。

しかし此等の問題は、今なほ未決で、いづれも將來の研究に待たねばならぬ。參考のため次に卑見を附記して置く。



(一) 我輩は志志幾活用(し)を語根に属するものとは思はぬ。それは戀(こい)し戀(こい)と、駭(おそ)し(駭(おそ)く)忙(いそ)し急(いそ)く願(ねが)し願(ねが)し頼(たの)し頼(たの)むなど動詞より轉じたもの鈍(とん)し鈍(とん)まし狭(せま)し狭(せま)ましなど形容詞の名詞法から轉じたもの女(メ)々(々)し美(ヒ)々(々)しなど和漢の名詞より轉じたもの苦(ク)々(々)し白(シ)々(々)しなど形容詞の語根から出たものまた惜(アハ)工(ク)空(ク)言(コト)などの例について考へればこのしは語根以外のものであるといふことは、少しも疑ふべきところでない。

(二) 然しなほ我國語と同系の韓語の形容詞を参考すれば、一層このことが明瞭である。韓語では次の表に示す通り動詞形容詞活用が同一であつて、我國で二つに別れたものが彼に於ては一つになつて居る。我國語に於ても活用の古體は必ずかくあつたものと考へられるのであるが、

語根	副詞法	名詞法	名詞法
寒(ヒヤ) chip	chip-ke	chip-ki	chi-um
宜(ヨク) nira	nira-ke	nira-ki	nira-m

此形容詞活用中にはしといふ形がない。それ故しは活用に属するものでないといふことは分かるが、また次の如き日韓同語原の形容詞を比較して見るに、

日本語	朝鮮語	堅	kut-ke	堅
直	nop-ke	高	nop-ke	高
乏	tumur-ke	乏	tumur-ke	乏
深	kip-ke	深	kip-ke	深
細	kop-ke	美	kop-ke	美
普	man-ke	多	man-ke	多
狭	chop-ke	狭	chop-ke	狭
同	kak-ke	同	kak-ke	同
少	chok-ke	少	chok-ke	少

乏(ヒ)く細(ホソ)く少(オホ)くなどのしがまた語根でないといふことも分る。然らばこのしの所屬は何であるかといふにまだ定まつた考ではないが、左行變格の爲てはある。



V

まいかと思ふ。既に前にも述べた通り、爲は有得など、同じ様に活用言の語根に結びついて自他等を別ち、其他罪す無みす嘉す、閑すなど、和漢の名詞と複合する場合もあるから、志幾幾活用のしは、佐行變格のしが、形容詞の語根または名詞など、結びついて出来たものであらうと思ふのである。

全體爲は佐行變格であるけれど、之と同原の敬相助動詞すは、古く四段に活いて、釣せすらしも舟出せすかも御手にとらし給ひなどの例がある。其上、打消の助動詞まじはじく、じきと形容詞の様に活くが、このまじを推量の助動詞まし、使役の助動詞しむと比較して考へるに、此等のまじは見るといふ動詞で、しじは爲といふ動詞だといふと分かる。これはいづれ助動詞の條で詳しく述べる積りであるが、この様に爲といふ動詞が一方に於て古く四段に活き、また一方に於て形容詞活用をするとから推して考へると、すはもとさし、すせしく、しきなど、活いたものと思はれる。之は即ち動詞形容詞の活を兼ね合せた古い活用で、其後これが二つに別かれしく、しきは形容詞専門となり、其他は色々變化をうけた末、遂に佐行變格となつたのであらう。要するに美々し執念しなどは、解す困す、閑

す存すなど、同じ様に爲の復合したものであるといふとが大體の私見である。志幾活用のしも矢張これと同じであらうと考へるが、これは一層研究を要するところである。

それで、先づ語根は(一)クシキ(二)シクシシキを除いたもの、即ち近高長無空など、假定する。これが其まゝで名詞に用ひられる場合、例へば手近山高丈長端近酢などがある。又他の語と複合して熟語となる場合、例へば新玉大殿空車神無月などの例もある。其外あなかしこあなちもしるなど終止法の如く用ひられることもある。

第一活用副詞法は他の用言又は副詞の意義を限定するもので、例へば月くまなく照る鳥高く飛ぶなどの類である。この法には良行變格の有が結びついて善くあれ悪しくあれ遅くあれ早くあれなど、なり更に約まつて善かれ悪しかれ遅かれ早かれなどとなることが多い。またこの副詞法に互爾波ばどもを加へて善くば善くともなど、用ひると、丁度過去の意の善ければ善けれどもの反對に未來の意味となるのであるが、これは善くありとも善くあらばなど、其中間に良行變格有の



省略せられたものであるから、こゝには一の法としてはいはぬ。  
 大槻博士は動詞の場合と同じ様に、任重く道遠しの重くなどの類に就いて別に中止法を設けられて居るが、之はやはり副詞法から轉じて出来たもので、重くと遠しとは全く分離したものは思はれぬ。中止法といふ名目をたてるとには敢て反對はないが、全く副詞法と別なものと考へるには容易に首肯する事が出来ぬ。また、世の中の愛げくにあさぬ古くより遠くへなど、この法を名詞の如く用ふる場合もある。これは動詞のく形名詞法と關聯して居るから、其條を参照せられたい。  
 第二活用終止法はいひ切つて一文の終とする形で、例へば家貧し心樂しの類である。この法は例へば見が欲し國空し煙美し妻宜し女頼し人長々し夜細し女愛し妹などの如く、他の語と複合することもあり、またいたはしの御事や音のみぞ我泣く君なしにしてなどの如く名詞の様に用ひられることもある。  
 第三活用連體法は例へば高き譽正しき人などの如く名詞の上に立ちて其意義を限定する形である。この法は其下に來る名詞を省いてそのまゝに用ひることもある。例へば古きを温ね新しさを知るの類である。

樂しみ弱み強げ怪しげ善き悪しきなどの如く、みげさが形容詞に添ふと名詞になる。その中げさは暫く別として、みは前に述べた通り、動詞のみ形名詞法に對するものであつて、く形名詞法と共に活用の古體と思はれる。  
 第四活用已然法は動詞有の複合して出来た形で、例へば善けれども悪しけれども遠けれども近けれどもなどは、善くとも悪しくとも遠くとも近くともなどの反對で、過去の意を表はして居る。しかしこの形の出来たのは比較的後のこととて、萬葉以往には見えないのみならず、後世とてもこの形の缺けて居るものがまゝある例へば少し如し平けし明けしなどには、いづれもけれの形がない。此様に動詞有が結びついて新しい別の活用となることをよく注意して觀察すると、其始め有が他の動詞根と結合して、諸種の活用を作つた時の傍が忍ばれるのである。  
 以上の外動詞の場合と同じ様にクとミとの名詞法を形容詞活用の中に加へたいと思ふ。

ク形の名詞法とは、例へば戀しくの多かる我世の中の愛けくに飽きぬ筑波根の善けくを見ればなどの類で、ミ形の名詞法は安み重み苦しみ樂しみ痛みなどの類で



ある。勿論この兩種の名詞法はどの形容詞にもある譯ではなく、其區域に頗る制限があるのみならず、又一方には詳か延らか大らか大やか大か和やか僅か明やか明か漸く若くは蓋くもなどの様に、この名詞法の變形とも見るべき形のみで、其他の形の遂に發達しなかつたものもある。然しながら動詞及び形容詞の活用論のところ、述べて通り、このク形は形容詞活用中の眼目であるから、此様に活用の不完全なものも形容詞の研究には捨つべからざるものと思ふ。

このク、ミ兩名詞法の轉じて動詞或は形容詞となることは、一つの面白い事實で、黄色女雄美肩裝束彩色力などから黄色し女々し雄々し美々し肩ぐ裝束く彩色く力ひなどの動詞形容詞が出来るのと同じ工合に多より大さし狭より狭まし塞く、又勤より勇まし忙がし勇む急ぐなどが出来る。此二種の名詞法の中、ク形の方は具體的、ミ形の方は抽象的の意味を具へて居る様で、其間に多少の區別がある。廣しより別れた廣む廣ぐの二動詞を比較して見れば、凡其消息が分かる。

### 第三章 助辭論

#### 第一節 助動詞

助動詞とは自己單獨では用ひられることなく、他の動詞また稀には形容詞名詞、互爾波などに結び付いて、これに或意味を添へる一種の活用言である。助動詞もとはそれ、獨立の意義を具へた活用言であつたのを、他の語に結びつけて用ひ馴れて居るうちに、いつしか獨立の意義を失つて、附屬的のものとなつたのである。丁度有得爲などが、他の動詞根に結びついて、諸種の活用を作る場合に、獨立の意義を失ふのと同様で、又ことに面白いといふべきは、この同じ有爲見など少數の動詞が、縦横無盡に活動して、助動詞の大部分を作つて居るといふことである。こゝに至つて吾人は、活用言の主要なる機關は、此等少數動詞の手に依つて運轉せられて居ることを知り、轉た言語發達の美妙なる作用に感ぜざるを得ぬのである。それ故助動詞の中には、其活用の缺けて居る様なものもあるが、又動詞には見ることの出来ない古形をも保存して居るから、彼此對照綜合して見ると、活用の古形を研究するに最も適當なる材料を得ることが少くない。



今助動詞を意味の上から所相勢相使役相指定打消過去未來推量詠歎の十種に分ち又其活用の上から動詞的形容的變體の三種に分ける。

動詞的活用のもの

指 定	使役相			勢相		所相		不定法 連用法 終止法 連體法 已然法 命令法
	せ	させ	しめ	られ	れ	られ	れ	
たら	なら	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ
たり	なり	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ
たり	なり	しむ	さす	す	らる	る	らる	る
たる	なる	しむる	さする	する	らるゝ	るゝ	らるゝ	るゝ
たれ	なれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	らるれ	るれ
たれ		しめよ	させよ	せよ			られよ	れよ

形容詞的活用のもの

詠 歎	推量			未來			過去	
	め	らむ	けむ	む	けり	せり	たり	なり
					けら	せら	たら	な
	めり				けり	せり	たり	に
なり	めり	らむ	けむ	む	けり	せり	たり	ぬ
なる	める	らむ	けむ	む	ける	せる	たる	ぬる
なれ	めれ	らめ	けめ	め	けれ	せれ	たれ	ぬれ
								ぬ
								てよ

指 定	副詞法	終止法	連體法	已然法
べく				
べし				
べき				
べけれ				



比況	ごとく	ごとし	ことき	
打消	まじく	まじ	まじき	まじけれ

活用の變體なるもの

	不定法	連用法	終止法	連體法	已然法
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね
過去			き	し	しか
推量			まし	まし	ましか
			らし	らし	らし

第一項 所相

所相は所謂働掛ハタケカケに對する受身ウケミであつて、他より起る動作を此方に引受くる意のものである。例へば「親子を育つ」といふ場合の「育つ」は働の此方より出て、彼方に及ぶもので、所謂働掛所相に對して能相といふの動詞であるが、これを主客轉倒せしめて「子親に育てらる」といへば、彼方より起る働を此方に引受くるので、此場合の育てらるは即ち所相である。それ故に能相の場合の目的たるものは、所相の場合に主となり、能相の場合の主は、所相の場合に動作の標準となる定めて、上例の「親」は即ち所相の動詞育てらるの標準である。

ぶもので、所謂働掛所相に對して能相といふの動詞であるが、これを主客轉倒せしめて「子親に育てらる」といへば、彼方より起る働を此方に引受くるので、此場合の育てらるは即ち所相である。それ故に能相の場合の目的たるものは、所相の場合に主となり、能相の場合の主は、所相の場合に動作の標準となる定めて、上例の「親」は即ち所相の動詞育てらるの標準である。

	不定法	連用法	終止法	連用法	已然法	命令法
所相	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ

ルの方は四段と奈變良變との不定法に連り、ラルは其他の諸活用の不定法に連なる定めてある。それ故に任せらるる合アヘせらるる罪ツミせらるる罰バツせらるるなどを任ツカさるる合アヘさるる罪ツミさるるなどといふのは、いづれも誤といはねばならぬ。然しながら「忘れらるゝ身」などの如く、wasu-re-ra-tuと良行音の多く重なる場合などには、其一を省い



てこれを忘らるゝといひ、又引かざるなどの如き特別の一動詞の如く取扱はるゝものゝ用例は古くよりあるから、此等は例外と認めなければならぬ。

此ルとラルとは、これまで相並んで兩箇の助動詞と見做されて居つたが、其實ラルのラは脱落したる動詞根の復活したもので、結極所相助動詞は、ルの一種に仮すべきものであらうといふのが我輩の意見である。これは既に動詞活用論の所で述べた通りであるから、其所を参照してもらひたい、即ちルの付く四段と奈變と良變とは、我輩が活用中の古形なりと主張する所のもので、其他の活用は盡く良變の複合したものであるから、所相の形に於て其本體を現はすのである。

立 生 着 見 似 爲 來

tate-r-aru  
iki-r-aru  
ki-r-aru  
mi-r-aru  
ni-r-aru  
se-r-aru  
ko-r-aru

即ち、此等の形には、二度有<sup>ア</sup>が結びついて居るので、其三箇の有<sup>ア</sup>が別々の働をして居

る。始のは語根に結びついて動詞となり、二度目のは其所相を作つて居る英語の *stay* の様にるのである。同じ一つの有<sup>ア</sup>といふ動詞が、二度とも違ふ作用をして、然かも二度ともその原義を忘れられて居るといふことは、研究者の最も翫味すべき點であらうと思ふ。國語では、自動詞も時として所相の形をとることがある、例へば死<sup>ナ</sup>なる去<sup>ナ</sup>なる泣<sup>ナ</sup>かななどの類である。

### 第二項 勢 相

自ら爲す力のあることを自覺する意のものが勢相で、其助動詞は所相と同じくルとラルとの二種である。

勢 相	不定法	連用法	終止法	連體法	已然法	命令法
	れ	れ	る	るゝ	るれ	
	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	

其接續法も亦所相と同じで、たゞ勢相には所相の様に標準の語がない。此助動詞



の語源もまた有<sup>レ</sup>或は得<sup>レ</sup>てあらう、口語では押<sup>サ</sup>せる勝<sup>カ</sup>てる行<sup>キ</sup>けるなどいふ。此勢相が稍變じて、動作の自から起つて押さへることの出来ないこと、即ち自然にしかせざるを得ざる意を表はすことがある、例へば行末案ぜらる<sup>ル</sup>なき友忍ばる<sup>ル</sup>などの類である。

古は良行の發音が不自由であつたと見えて其脱落し或は他行の音に轉ずることが屢ある。それで此所相勢相の助動詞もまた古く也行に轉ずる例があつて泣<sup>ナ</sup>か寐<sup>マ</sup>られぬに摺<sup>ズ</sup>らる<sup>ル</sup>なを泣<sup>ナ</sup>かゆ寐<sup>マ</sup>らえぬに摺<sup>ズ</sup>ゆななどとする。今日普通に用ふる所謂所有<sup>ソウヨウ</sup>なども云はるゝ有<sup>ア</sup>らるゝの轉て思<sup>オモ</sup>ふ—思はる—思はゆ—思ほゆ—覺<sup>オモ</sup>ゆなども同一の例である。

第三項 使役相

使役相は自ら手を下さず他を使役して爲さしむる意の助動詞で、ス、サス、シム<sup>ス</sup>の三種類がある。此中スは四段良變奈變に、サスは其他の活用に、シムは總ての活用に、いづれも其不定法を受くる定まりである。

不定法	連用法	終止法	連體法	已然法	命令法
-----	-----	-----	-----	-----	-----

使役相		せ	せ	す	する	すれ	せよ
さ	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ	
し	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	

それ故下二段の得<sup>レ</sup>しむ浴<sup>ユ</sup>せさす任<sup>ニ</sup>せさすなどを得<sup>レ</sup>せしむ浴<sup>ユ</sup>さす任<sup>ニ</sup>さすとし、一段の見<sup>ミ</sup>しむ佐變の商<sup>シヤ</sup>せさすを見<sup>ミ</sup>せしむ商<sup>シヤ</sup>さすなどとするのは、いづれも誤用である。使役相助動詞中のスの語源は佐變の爲であらうと思ふ。勿論使役相のスは下二段で爲とは活用が違ふけれども、これも既に動詞活用の所て述べた通り、もと爲も有<sup>レ</sup>の複合したもので、下二段の方が寧ろ古體である。なほ一步溯つて考へれば、有<sup>レ</sup>の複合しない前に四段に活いた形跡もある。釣<sup>ツク</sup>せす舟<sup>フネ</sup>出<sup>デ</sup>せす立<sup>タ</sup>たす知らすなど四段に活く敬語動詞は、いづれも此間の消息を傳へるもので、使役相の中でも通<sup>ツ</sup>はす遊<sup>ユ</sup>ばす驚<sup>オドロ</sup>かす動<sup>ウ</sup>かすなどは、一種の他動詞となつて四段に活いて居る。又敏<sup>メ</sup>しより出<sup>デ</sup>た悟<sup>ワ</sup>る諭<sup>コト</sup>すのサトスはサトラスの約で、其スは矢張四段に活いて居る。其他舞<sup>マ</sup>はす會<sup>カ</sup>はす下二段回<sup>マ</sup>はす合<sup>ア</sup>はす四段などの關係も、參考する價があると思



ふ。

次に、同じ使役でありながら、四段奈變良變はス、其他はサスと、此様に二つに分れて居る理由を考へて見るに、四段奈變良變の三は、活用の古體に近い寧ろ純粹のものであるが、其他の活用はいづれも有爲得などの複合して出來た雜り氣のある細工を加へたものである。例へば浴む(自動詞下二)見る(自上二)似る(自上二)等は、爲の複合によつて、其他動形浴むす(下二)見す(下二)似す(下二)を作つて居る。此様に爲は一度自他の變化に用ひられて居るから、これを再び使役相に使ふことが出來ぬ。それで此等の場合には、浴み見似などそれ／＼の名詞法を作つて置き、其上に爲の使役相をつけたものであらう。爲はもと四段に活いたものであるから、その使役相の古體はサスとなるのである。なほ次の例などを見て充分に研究するがよい。

自動	他動	使役相
着る	着る	着さす
懲る	懲る	懲さす
落つ	落す	落さす

降る	降す	降さす
浴む	浴す	浴さす

使役相勢相の助動詞は轉じて敬相となる。これは人を使役し、自ら爲す能力ある意より轉じたもので、これを二重にも三重にも重ね聞く聞かす聞かせらる聞かすしめさる聞かすしめさせらるなど、用ひて敬意を深める。召す(四段)といふ動詞は、もとの見るの敬相であつたのが、後には専用の敬語となつたもので、大君の召し、野邊にはなど、用ひた例がある。全體敬相の場合には古くは皆四段で、行かす立たす聞かす知らす爲すなど皆さうである。

第四項 指定

ものを指し定むる意の助動詞に次の三種類がある。

指定	不定法	連用法	終止法	連體法	已然法	命令法
	なら	なり	なり	なる	なれ	
	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
	べく	べし	べし	べき	べけれ	



(一) ナリは、にありの約て、活用も良變有と同じである。動詞形容詞の連體法、又名詞副詞、良波に連なつて、任するなり爲るなり宜なりばかりなりなど、用ひる。斯様にナリの語源は、にありて、其意義は、にてありであるから、武藏なる隅田川、交なる人など、用ひるはよいが、顔回なる者など、用ひるは誤謬であると、廣日本文典にすら書いてあるが、これは二種の語を混合して居るための誤解であらうと思ふ。顔回なるものなるが、にあるの約まりだから、いけなやとならば、隅田川なり、のなりも、にありだから、同じくいけなや譯ではないか。父なる人のなるは、にてあると解けるが、武藏なるものなるを、にてあると解くのも變ではないか。語の成り立ちを分析して、語源に論及することは、學者の事業で、活きた語を用ひて居る場合には、誰の頭にも語源の考を浮かべるわけがない。自分の考では、武藏なる隅田川なりのなるとなりとは、性質がちがふと思ふ。武藏なるものなるは、にとありとの假に結ひついたもので、これをものと二つに分けて、武藏にあるとしても、意味の上になさしかへはない。それに引かへ、隅田川なりのなりは、語源は同じに、にに連ないが、これをにありに分けては、意味が毀れてしまふであらう。丁度形容詞にも同じ場合

がある。くとありとが結ひついて、善かれ悪しかれなど、なるのは、假初の結ひつきであるから、これを引き離して善くあれ悪しくあれとしても、意味を傷けない。然るに已然法の善けれど悪しけれど、のければ、同じくとありとの複合であるが、此方は既に一の活用に變じたものだから、引き離すわけには行かぬ。それ故、顔回なるものなるは、にあるの約てなく、別に指定の助動詞となつたものであるから、用ひたとてもさしつかへはない。武藏にあるといふ様な場合にこそ、にとありとは約まりもするが、武藏にありといふ様な場合には、どうしてもにとありとは約まりぬではないか。これを見ても、指定の助動詞なりは別の活用言であつて、にとありとに引きはなして考へるべきものでないといふことが分る。其上に、にありの約のなりは、靜かなれ明かなれなどの様に命令法を作るが、指定のにはこれがない。

(二) ナリは、とありの約まりて、名詞の下にのみつき、親たり子たり臣たり君たりなど、用ひる。

(三) しは未來を推定する語で、諸動詞の終止法たゞ一つの良變のみは連體法に連なる定めてある。これは助動詞の接續上に良變の古體が残つて居るから、とは



終止法が今の口語と同じ様に、あるてあつた證據である。かうなれば良變は四段活用の中にはいつてしまふわけである。

べしは終止法を受くべきものであるから來るべし、歷るべし、爲るべし、見るべし、觸るべしなど、用ひてはならぬ。此誤は特に一音の動詞に多い然し上一段活用に異例があつて、古く見べし、似べしなどの用例がある。

このべしの語源に就いて考へるに、べはメに通ずる音で、未來のむと關係のあるものらしい。それで形容詞と同じ活をして、ベミといふ形さへあるから、未來の助動詞ひが形容詞活用をしたものと思はれる。動詞形容詞の用を充分に研究するのには、かういふ點に着目すべきことで、將來充分に調べたならば、色々の事實が分り出して來ると思ふ。

第五項 打消

打消の助動詞に次の三種がある

不定法	連用法	終止法	連體法	已然法
-----	-----	-----	-----	-----

打消	ず	ず	ぬ	ぬ
まじく	まじ	まじき	まじけれ	

(一)ズは單純に動作を打消す語で、諸動詞の不定法を受け、行かず、落ちず、見ず、有らず、來ずなど、用ひる。此助動詞は佐行と奈行とに跨がつて活いて、寸他の助動詞とは趣が變つて居るが、然し例へば行かずの延言を作ると行かなくとなり、又禁止の語に莫思<sup>オモヒ</sup>などがあり、形容詞の語根に無<sup>ナ</sup>があり、其他古く取<sup>ト</sup>久<sup>ク</sup>乎<sup>ハ</sup>不知<sup>シラナク</sup>などのあるから、もとはナニスネと活き、形容詞無しと共に否定語の基礎であつたものと思はれる。さてズは下に述べるジと同じく語源は爲<sup>ナ</sup>でもとは其前に打消の奈行音のあつたのが約まつて、其結果濁を帯びたものであらう。丁度參らんとすの「參らうず」となるのと同じ聲音變化である。

(二)マシは未來を推量して打消す語で、諸動詞の終止法良變のみは連體法を受け、行くまじ、見るまじ、爲まじなど、用ひる。それ故爲まじき爲るまじき恨みまじ報ひ



まじなどは、凡て誤りである。

まじのまは未來のむと同じく語源は見であつて、その構造は丁度指定のべしと同じである。たゞじが濁つたが爲め打消の意味を帯びただけで、意味も構造も全く同様である。

(三)は諸動詞の不定法を受けて、行かじ爲じ有らじなど、用ひられる。これはまじに比べると、未來のまがないだけに意味が少し強い。語源はずの所に述べた通り爲てあらうと思ふが、何分活用も缺けて居るから充分に分りかねる。

第六項 過去

現在過去未來は時の三大別で、今更説明する必要もないが、同じ過去でもずつと以前に起つて其跡の全く消え去つてしまつてから、現在までよほどへだたりのあるもの、即ち現在とは全く縁のないもの(大過去)もあれば、過去に起つてもそれがつい現在の前に終るか、或は現在までも引續いて居る(半過去)のものもある。それから又自分の身を、假に此等三種の過去の地位に置いて、未來を推定する場合にも、同じく三通りの區別が出来る。

此等の時の助動詞を説明する前に、助動詞の力を借らず動詞の活用其ものだけで、表はして居る時のことを少し述べて置く。全體言語の發達上からいへば、初めは活用のみで時の關係を示めしたものが、思想の進歩と共に言語も段々と發達して、活用のみでなく他の獨立動詞の力を借りる様になり、其獨立動詞が用ひ馴れて居るうちに、とうとう助動詞となり變つたものである。勿論動詞の活用とても、學理止がらぬへば、もとはそれ／＼獨立の意味を備へて居た語で、それが自然の變遷に於て、活用の語尾となり、果てたものであるが、これは極々古いことで、其取調などは全く専門の業である。さて義門其他の命名で、今日普通に行はれて居る分類法の中に、將然言終止言已然言の三種がある。これが即ち未來現在過去に相當するので、古人も活用が時の區別を表はすことを認めて居つたのである。此中終止言が現在であるといふことは更に異論はない。又大槻博士などは、已然言に過去の意のあるのはこれに結びつく、互爾波の然らしむるところで、活用其もの／＼力てなると説いて居られるが、自分はやはり古來の説の通り、活用の中に過去の意味を含むものと考へる。酌まば酌めば飲むとも飲めどもなど、互爾波ばどもは未來に



も過去にもつくから、其中に時の意を含むものとも思へない。其上、古の人に我あれや山や死にする死ぬれこそなど、互爾波がなくとも、已然言は過去の意を示めず、韓語との比較上、凡の活用を通じてこの已然言の語尾たるひ音は、得といふ動詞であらうといふ考さへも持つて居る。これは丁度英語の動詞の過去を表はすisはもとて、其isはis(爲)の重複過去isの語尾より出て居るのと、甚だよく似て居る。

然したゞ、一つ將然言だけは、古人の説が違ふやうに思ふ。既に諸先輩もいはれて居る通り、將然言に未來の意味の出来るのは、助動詞其他の加はるがためであるのみならず、又打消をも作るのだから、これに未來の意味があるとも思へない。そして、自分が新らしく其かはりとして提出したいと思ふのは、今までの人が全く時の考以外に置いてある連體法でありやなしやあるかなきか来やく来るか、などを對照して考へて見ると、連體言の方は幾分か未來の意味が添うて居る様に思ふ。勿論此事は、朝鮮、滿洲等の語とも比較した結果、自分の心に浮んだ一の疑問

であるから、云へばとて決して連體言を盡く未來と解釋すべしといふのでは、ないが、来んといひし程や過ぎぬる秋の野にたれまつひしの聲の悲しきといふ歌の過ぎぬるなどは、勿論過去の助動詞ではあるけれども、たれ過ぎたかと單純に過去を疑ふのではなく、過ぎたであらうかと未來の心もちを含んで居るので、これは充分に玩味すべきところであらうと思ふなほ係結の所で述べることにせう。さて過去の助動詞に次の六種類がある。

不定法	連用法	終止法	連體法	已然法	命令法
て	て	つ	つる	つれ	てよ
な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ
たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
せら	せり	せり	せる	せれ	せれ
けら	けり	けり	ける	けれ	けれ
		さ	し	しか	



(一)ツは止まるなど、同じ様に處を活かされたものであらう。諸動詞の連用法に連なつて半過去の意を示めず例へば

我心春の山邊にあくがれて長々し日を今日も暮しつ

などの様に、現在と接近して居る過去を示めずもので、時としては現在も其一部分となつて居ることもある。雪はふりつゝなどのつゝはこのつゝを重ねたもので、現在進行中の意を示めずものである。

(二)又は動詞往ぬより出たもので、萬葉集には往の字をあてゝ居る。それ故、奈變の死ぬ往ぬのみに限つて連なることがない。この助動詞も半過去の意であるが、つよりは稍意味が強くなり度今出来てしまつたといふほどの心もちである。白き灰がちになりぬるはわろし、梓弓おして春雨今日ふりぬなどの類である。見つる聞つる有つるなどは他動詞に限り散りぬる降りぬるなどは自動詞に限るといふ論もあるがこれは必しも限らないやうである。

(三)タリはつとありとの複合したもので、其意味もやはり居るといふ位のところである。これも諸動詞の連用法に連なつて半過去の意を示めず。

ふる里は春めきにけりみよしのとみかきが原を霞こめたり  
(四)セリは爲と有との複合したもので、名詞のみを受けて殆ど獨立の動詞の様に用ひられる。

秋ふかみ青葉の山も紅葉せり名をば時雨も染めじと思ふに  
このせりと同様に、四段活用の連用法とありとの結び付いて、一種の半過去を作る  
ことがある例へば行けり讀めりなどの類で、この半過去は最も普通に行はれ居  
るがため、四段以外の活用にも死ねり居れり任せり異れりなどに用ひるが、これは  
文法の習慣上誤謬といはねばならぬ、勿論、助動詞の中にはせり爲ありめり見あり  
けり來ありなどの例もあるから、元來廣く他の活用にも通じて行はれたに違ひな  
いが、せりめりけりなどに、特別の意義が出来て助動詞となつてから、自然用ひられ  
ぬ様になつたものであらう。  
以上述べたところの半過去の助動詞は、古く引きたりゆるなりはたり歴たりぬる  
火おこしたりぬるなど重ねて用ひた例もあるが、後世には行はれない。  
(五)ケリは來と有との複合したもので、萬葉集には來有の字をあてゝ居る。これは



諸動詞の連用法に連なつて過去の意を表はす。  
 元來このけりは有の複合して居るだけに過去の時を表はす外に多少これを眺むる様なこゝろもちがある。それ故時を離れて心なりけり浮世なりけりなど説明もよくは詠歎の意のみを表はすものもある。  
 (六) これも過去の助動詞で諸動詞の連用法に連なる但し加行變格には來<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>がとも來<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>しかともなつて來<sup>キ</sup>の例なく佐行變格には爲<sup>シ</sup>爲<sup>シ</sup>爲<sup>シ</sup>か爲<sup>シ</sup>か爲<sup>シ</sup>となつて爲<sup>シ</sup>爲<sup>シ</sup>爲<sup>シ</sup>が爲<sup>シ</sup>の例がない。かやうに此助動詞は連用法に連なるのが通則であるから四段言に於て押<sup>シ</sup>過<sup>シ</sup>といふべきを押<sup>シ</sup>過<sup>シ</sup>といふべきを推せし過<sup>シ</sup>といひ下二段に於て任<sup>セ</sup>任<sup>セ</sup>任<sup>セ</sup>しといふべきを任<sup>セ</sup>任<sup>セ</sup>任<sup>セ</sup>しといひ佐變にてのせしといふべきをものししといひまた凡て終止法はどなるべきに見し暮しなどいふは何れもあやまりである。此助動詞も亦其變化が加行佐行の兩音に跨つて居る。此中はけり來<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>と同じく來<sup>キ</sup>より出てしはせりと同じく爲<sup>キ</sup>より出たものと思はれる。其他知<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>せば寢覺めざりせばなどのせにも過去の意があつて知りしかばざ

りしかばと相對して將然と已然となつて居るからもとは共に一の活用を作つて居つたものであらう。  
 以上述べた過去と半過去の助動詞が重なつて咲けりける給べりき書けりつる團居せりけりなど用ひ又てきにたりきてけりにけりたりけりと重つて大過去を作る。  
 又わびつゝも昨日ばかりは過してき今日や我身の限なるらん  
 郭公峰の雲にやまじりたし有とはさけど見るよしもなき

第七項 未來

未來の助動詞は次の二種類である。

未	不定法	連用法	終止法	連體法	已然法
來			む	む	め

このむは次のけむらむめりまし又打消まじ等のむむめと同じく動詞見より出たものであらう。諸動詞の不定法に連なつて押さむ任せむ見むなど用ひられる。



鏡山いざ立よりて見てゆかむ年経ぬる身は老やしぬると  
また過去のきと結びついで、一種けむといふ助動詞が出来る。

	不定法	連用法	終止法	連體法	已然法
			けむ	けむ	けめ

これは、假に身を過去に置いて未來を推量する意のもので、諸動詞の連用法に連なる。

あれはてゝ風もさはらぬ昔の庵に我はなくとも露はもりけん  
又半過去のてなたらが未來のむと重なつて、半過去未來を作る。

ありとても幾世かは経る韓國の虎ふす野邊に身をも投けてむ  
形こそ深山かくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ  
又過去のてたりと過去未來のけむとが重なつて、大過去未來を作る。  
夏山に戀しき人や入にけん聲ふりたてゝ鳴くほいとさす

第八項 推量

推量の助動詞に左の四種がある。

	不定法	連用法	終止法	連體法	已然法
見		めり	めり	める	めれ
見		まし	まし	まし	ましか
見		らし	らし	らし	らし

此等の諸動詞のむめまは見よりいで、らしは有より、しは爲より出たことは、既に度々述べた通のことである。

(一) めは諸動詞の終止法(良變のみは連體法に連つて、未來を推量する意を表はすものである。

春霞何かぐすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

(二) れはその接續法は全くらむと同じことて、たゞ意義の上に多少輕重の差がある。らしは有見の約めりは見有の約で、丁度位置の轉倒して居るだけ意味もちが



ふ。即ちらむは單純に未來を推量し、めりは然りと定めて推量する意があるから前者は疑を挟んでその意輕く、後者は決定の意が稍重いの。立田川紅葉みだれを流るめり渡らば錦中や絶えなん

(三) シは諸動詞の不定法に連なつて未來を推量し、しかせんとすの意を表はす助動詞である。今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし消ずはありとも花と見ましや

世の中にたえて櫻のながりせば春のこゝろはのどけがらまし。ましのしは多分過去と同じて爲より出たものであらう。それ故ましと使役相のしむとは爲見兩語の位置を轉倒したもので、意味の上にも多少其ちもかけが残つて居る。このましかばもませばと相對して已然將然を分つて居る。過去のきの條に述べたこと、對照して見るがよい。

(四) ラシは諸動詞の終止法良變のみは連體法に連なつて現在及び過去の推量を表はす語である。

みよしの山の白雪のもるらしふるさど寒くなりまさるなり。らしのは勿論有てしはましのしと同じ性質のものであらう。しかし此等のは形容詞活用中のしと同じく、今一層研究を積まなければ其真相を明かにすることが出来なう。

第九項 詠歌

詠歌の助動詞は指示の助動詞から轉じたもので同じくナリであるが、たゞ指示の連體法を受けるのに、詠歌の方は終止法良變のみは連體法を受けるといふだけだ。違ひである。連體法を受けるのは其下に名詞を省いた心もちであるから、例へば「入まつひしの聲するなり」といへば、聲する野とか庭とかいふ具體的の意味があるが、入まつひしの聲すなりといへば爲といふ動詞の終止法其ものを名詞と見做したるだけに、其意義が幾分か抽象的で、自然餘情が添はるわけである。但し四段一段の如く終止と連體との形が同じ場合には意味の上からこれを區別するより外しかたがない。

みな人は花の衣になりぬなり苦の袂よかわきだにせよ



秋の野に人まつ蟲の聲すなり我かと行ていざとぶらはん

第十項 比况

と比較する意の助動詞にゴトシといふのがあつて、諸動詞形容詞助動詞の連體法、もしくは互爾波のがを受ける。

比况	副詞法	終止法	連體法	已然法
ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	

此助動詞は且(讀み且書く)がてら花見がてら(ごと)年(ごと)に(かた)く(旁)など(又)同じ語根の語で同じ等しなどの意あるものと思はれる。わがごとく物やかなしきほととぎす時どともなくよたよたなくらん

第二節 副詞

副詞は動詞形容詞又は他の副詞にそつて其意味を修飾する語である。其中、今昔の如く時を示めすもの、内に外にの如く所を示めすもの、甚(た)空(の)如く程度を表はすもの、赤く白く(の)如く状態を表はすもの、一度再(の)様に數を示めすもの等の諸種類がある。また構造の上からも次の様に數種の區別を立てることが出来る。

- (一) 體言にて副詞となれるもの。例へば古今再(イニシヘイマツカ、ヒキイライシヤイロコソフ)一切萬等の類。
- (二) 句よりなれるもの。必(カナラ)ならず(イナシヤ)況言(イナシヤ)は(ひや)例へば(譬へば)の類。
- (三) 互爾波(ニ)にての添ひたるもの。此中には常に偏(ヒトヘ)重(オモシ)に更新(アタラシ)白(シロ)の如く名詞に添ひたるもの、盛(カガハ)に(さか)る(頻)に(し)きる(互)に(違)ふ(亂)る(など)連用法にそひたるもの、恣(ホシイ)に(欲)い(盛)の如く句に添ひたるものなどがある。其他(オノオノ)にての例には長々と遙々(トシトシ)と果(ハ)して(幸)うじて(など)もある。
- (四) 動詞の連用言より轉じたもの。假令(イフヘ)譬(の)の類。
- (五) 疊語よりなれるもの。度々(タビタビ)抑(ノソ)其(モノ)も(遙々)の類で、動詞の疊語は染々(シメシメ)取々(トケトケ)絶々(ツツ)益々(タガヒタガヒ)有々(アツクアツク)知らず(など)の如く、必ず副詞となる。
- (六) ク形の副詞。能く宜しく(よくよく)輒(トク)く(遠)く(など)主として形容詞の副詞法であるがこのク形は既に動詞のところていうた通り、もとは活用言の全部に通じて行はれたものであるから、今もその断片がところ(こ)ろ(こ)ろ(に)残つて居る例へば僅(シカ)極(の)遙(の)晴(る)など



の外、恐らくなど加行の延言と稱せらるるもの、中にも多く存して居る。禁示の意を表はす副詞にナといふのがある。これは諸動詞の終止法良變のみは連體法の後につくか、或は連用法の前加變佐變のみは不定法に立つて、その後をそて受ける例へば、行くな有るな行きをな來そな爲その類である。

na (勿) 禁止の副詞

na (否) 紀に不須の字を當つ

na-si (無) 形容詞

na-i (豊) 價なき寶といふとも一杯の濁れる酒に豊まらめや

na-i (何) 副詞。花にあかて何かへるらんなど。

na (不) 打消助動詞。たつきをしらにあかになど。

na (不) 打消助動詞。天言より言ひぬる。

na (不) 打消助動詞。

### 第三節 接續詞

接續詞は二箇の文又は句の間に立ちて、上下をつゞけるものである。大抵は他の品詞から轉じたもので、又(名詞)又か、若くは(し)じくと活けば、形容詞より出たるものなるべし、且如兼など、同じ語根より出づ、抑其も(或)有謂は、如之然のみならず、并に及び(い)つれも動詞などの類である。

### 第四節 豆爾乎波

豆爾乎波とは、昔漢文を訓讀する時に、後世の如く送り假字を振ることなく、漢字の四隅四側中央にところ、一、點をつけ、これを目安として讀んだ其點を、左の下の隅から上に向つて四隅を順々に數へると、てに、を、はの四字が配當せられてあること、から出た名前であつて、略しててにはともいふ。この部類に屬する語は、勿論單獨では何等の意味もないのみならず、其形も極短くして、いづれも他の語の下に付き、これに諸種の意義を添へるものである。この豆爾乎波の研究は古くから初まつたものでも、とは獨立せぬ語は助動詞でも、何でも大方皆この中に押し込んであつて、其性質定義等も甚だ曖昧なものであつ



たが、世々の學者の手を経て追々整理せられ、よほど簡單になつたのみならず、或人は此等をごとく、他の品詞に配當して、豆爾波といふ名目を根底から除き去つてしまはうと試みた位である。しかし、國語はそれ／＼特別の性質をもつて居るから、果して此様に徹頭徹尾西洋式にすることが便利であるか否、西洋式にすることが出来るであらうかといふことは、随分疑問である。それで、自分は此等のことを將來の研究にゆづり、全體の分類法は左の如く大槻博士の説に従ひ、箇々の語について専ら自分の考を述べやうと思ふ。

第一項 名詞のみにつく豆爾波

- (一) が の い
- (二) の が
- (三) の つ
- (四) に
- (五) を
- (六) へ
- (七) より から
- (八) と
- (九) まで

第二項 種々の語の下につく豆爾波

- (一) は
- (二) も
- (三) ぞ
- (四) なも なひ
- (五) じ
- (六) こそ
- (七) だに
- (八) すら
- (九) さへ
- (十) みづから
- (十一) やが

第三項 動詞の下につく豆爾波

- (一) ば
- (二) と
- (三) ども
- (四) ば
- (五) て
- (六) つい
- (七) ば
- (八) ば
- (九) ば
- (十) ば
- (十一) ば
- (十二) ば
- (十三) ば
- (十四) ば
- (十五) ば
- (十六) ば
- (十七) ば
- (十八) ば
- (十九) ば
- (二十) ば

(一)が、これは動作形状の主體たる名詞を擧げて示めす豆爾波で、例へば鳥が鳴く風の吹くなどである。

このがのと同じ意味で、其用例の古い一種のイといふのがある、例へば木乃關守伊家有妹伊伴健岑伊一日太爾君伊之哭者などで、其他動詞の下について捨つるにこれを持つ「い」なども用ひる。此用法は古くもあり、且つ一局部に偏して居るけれども、丁度韓語にもこれと同じイといふ語があるので、或は古い豆爾波の名残ではあるまいかと思はれるから、こゝに添へて置くのである。

(二)が、これは名詞と名詞或は名詞と見做すべきものとの間に立つて、所屬の意を示めすものであるが、それから轉じて、次の様に色々の關係をも示めす様になつた。

木乃關守伊  
の妹伊伴健岑伊  
一日太爾君伊之哭者  
など、  
三十三







り故らに進んで少女の方に行くといふやうな心もちが含まれて居る。この二種の區別は韓語にもあつて、今もなほ行はれて居るが、國語では<sup>二</sup>に通ふを<sup>一</sup>は、古くより外見當らない。さて、<sup>二</sup>に通ふのは、もと動作の主體を示めすのから轉じたものであらうから、少女の逢ふといへば、此方よりも彼方に重きを置いて、いふものと見てよからう。

(六) これは方向を示めす豆爾波で、前(目邊)後(尻邊)古(往)邊(夕)邊(表面)の邊などの熟語中にある、<sup>二</sup>と同語原から出たものである。それ故、地位を示めす豆爾波の<sup>二</sup>と比べると、休止と進行との別があるから、此二者は注意して別たねばならぬ。古人は、僧正遍照が許に奈良へ罷りける時、筑紫へゆくとして、明石の浦にてなど、明らかに使ひ別けて居る。それ故、前に進む山へ登るなどは正しくない、尤も後には<sup>二</sup>をへに通はして用ひた例もあるが、<sup>二</sup>は決して<sup>二</sup>の意味に用ひられたことがない。(七) ヨリ、カラ これは、今日より明日からなど、何れも動作の起點を示めすものであるが、<sup>二</sup>は又轉じて、山より高く海より深しなど、比較の標準を表はすこともある。古くは、<sup>二</sup>の<sup>二</sup>を省いて、<sup>二</sup>とも、又通はして<sup>二</sup>とも用ひて居る例へば、あが松原よ

ト花す(同子)

見渡せば田子の浦ゆ打出て見ればなどである。斯様に<sup>二</sup>をとり除いても、<sup>二</sup>の<sup>二</sup>かへがないのを見ると、<sup>二</sup>からの<sup>二</sup>も同じこととして、<sup>二</sup>からの<sup>二</sup>はもと獨立の豆爾波であつたのではなからうかと思ふのである。からの<sup>二</sup>は都(宮)處、其(處)隱(處)陸(國)處(海)處(丘)處(處)などのかと國語で、處といふ義であるから、自(手)づから(枝)ながら(など)のかも、處の意に解して、己の處手の處枝の處とする、此場合にも<sup>二</sup>が別に殘る。それで、韓語には<sup>二</sup>といふ豆爾波があつて、<sup>二</sup>を以ての義(instrumental)に用ひられて居るから、自分はこの<sup>二</sup>の<sup>二</sup>も、これと同義の獨立の豆爾波であつたらうと思ふのである。泛(海)往(書)紀(步)從(行)者(萬)葉(などの)から、<sup>二</sup>よりは、此古義を存して居るものてあるまいか。此問題はなほ十分研究すべきことであると思ふが、此他にも出所不明の<sup>二</sup>が随分ある。さかし<sup>二</sup>が<sup>二</sup>ほど<sup>二</sup>程(ほとり)端(味)ら(寒)ら(佗)し(う)悲(し)う(許)などは、<sup>二</sup>も参照すべき値がある。八) これは指し定むる意の豆爾波で、親と思ふ家と定むなど用ひられる外に、また次の數種がある。

「と共に」の意のもの。

人と語る友と住む



「となりての如く」の意のもの。 雨と降る花と散る」

「とての意のもの。 梅さかばかれにし人も見にと來なまし」

また同一動詞を重ねて其間に挟み、またの意に用ひることもある例へば、ありとある吹きと吹く生きとし生けるなどの類である。

この互爾波は動詞形容詞助動詞の終止法命令法稀には連體法を名詞と見做して受くることもある。

春やとき花やあそきときわかん鶯だにもなかずも有かな

誰見よと花さけるらんしら雲のたつ野と早く成にしものを

櫻花ちるとも知らて月影をあるとはかなく思ひけるかな

またとにかくとばかりともすればとはいふものゝなどのとも此互爾波で、上の名詞を省略したものである。

このとと形は同じで、漢字の與の意味に用ひられるものがある。これは文中に並列せる同等の語句を接続するもので、語句の數だけ一々繰返すのが定まりである。流れ木と立つしら浪とやくしほといづれかからさわたつみの底

(九) マデ これは至り及ぶ意の互爾波で、韓語にも 마디 (及ぶ) という詞がある。

我君は千代に八千代にさされ石のいはほとなりて昔のむすまで

第二項 種々の語の下につく互爾波

(一) ハ これは事物を引離して、他と區別し對照する意のもので例へば、天は高しといへば、其裏に地は低しなどいふ對照の語句が含まれて居るのが本義である。

人はいざ心も知らずふるさと花ぞひかしの香に匂ひける

なども、人と古里とを對照せしめたものである。それ故、アストン氏はこれを對格 (opposite) と名づけて居る。

故草野文學士がこののはの一種で、例へば、象は體大なりなどの象はを新たに總主と名づけられた。これは氏の創見で、體大なりといふ一説話の上に、更に象はといふ主語が冠さるのであるから、全く主格が二重になるわけである。然し、このはもその作用は同じことで、象は體大なりの裏面には、蟻は體小なりなどいふ對句が含まれて居るべきである。しかし、此はは後世使用の區域が廣くなつて、主格のが、のと同様に用ひらるゝ様になつた。韓語では今日も此區別が嚴重であつて、하늘とい



ふ豆爾波がこの對格を表はして居る。

このはの語源はもの或はこの義で、古くは者の字を當てゝ居る。韓語は今ももの義である。又このはは時として、行かずんばあるべからずなどの如く、濁を帯びることがある。

(一)モ これは同じ様の事物を重ねて擧げる時に用ひる豆爾波である。これやこのゆくもかへるも別れては知るもしらぬも逢坂の關また其一つを擧げて、他を略することもある。

明石がたえしまをかけて見渡せば霞の上も沖つしらなみこのもとあれ有とが重なつてもあれとなり、更にそれが約まつてまれとなる。

君といへばみまれみずまれふじの根のめづらしげなくもゆる我戀(三)ゾ これは多くの中で、一つを指し定むる意の豆爾波で、其末を結ぶ活用言は必ず連體法を用ひる。この豆爾波は、其の濁つたもので、それと指し示めす意のものであるといふのが昔からの説である。あゆひ抄曰く凡そそは、それこそは、これそれをつゝめたるあゆひなり。是をもととして見るに、みな事物を一すぢにさし

だめていふ詞なり。たとへば石と玉とを人のもたるをまじへ置きながら、それぞ玉よとをしふるなり。又玉をさしだして、わが手にとめて、これこそ玉なれといふべし。このこもなす撒るぞめてたき櫻花有て世の中はてのうければまた切るいぞと唱へ、語の終に置いて指し示めす意のものがある。活用言には常にその連體法に連なる。

名にめてゝをれるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人にかたるなこれと同じ様で、疑ひ問ふ意のぞがある。

たれ聞けとなく雁ぞ我宿の尾花が末を過ぎがてにしてまた、文の終に「云々なりとぞなどいふぞは、其下に「いふなる」などの結びを省いたものである。

(四)ナモナム(ナン) これは略ぞと同じ意の豆爾波で、其中なもが一番古い。この豆爾波は文には多いが、歌には甚だ少ない。その末を活用言の連體法で結ぶこともぞと同じである。然し文章の末に、かくなんなどゝ下の結びを省いて用うること



もある。

いつはなもこひずあるとはあらねどもうたて此ごろ戀のしげきも

さくら花山に咲くなん里のにはまさるときくを見ぬがわびしさ

(五) これも其から出たもので指し定むる意の豆爾波である。

いつまでか野邊に心のおくがれん花しちらずばちよもへぬべし

ほのくくと明石の浦のあさぎりに鳥かくれゆくふねをしを思ふ

いつしか必ずしもなきにしもあらずなどは、今日も用ふる。

(六) コソ これは多くの中から一つを擇び、だす意の豆爾波で、其末を活用言の已然法で結ぶ定めてある。

春の夜のみはあやなし梅の花色こそ見え

こそその語源を是其とする説もあるが、如何であらうか。

また、古くゆめに見えこそ遊びのみこそなど、願望の意を表はすものもあり、又大將

こそ父こそと呼べばなどの如く、呼びかくる意のこそもある。此等は何れも下に

結び語をもたぬ。

(七) ダニ、スラ これはいづれも事物の一端を擧げて、其餘を推して知らしむる意の豆爾波である。

春霞何かくすらんさくら花ちるまをだにもみるべきものを

たきの音をいかにかくらん都すら物あはれなるころにはあらずや

口語でだにはでもすらはやはりなほ萬葉には尙をあつといふ位の心もちである

が、古今以後はだにをすらと混用する様になつたから、今は殆ど兩者の間に區別を

立てることが出来ない。然し此次に述べるさへをもこれと混用することのある

のは避けねばならぬ。

(八) サへ これはあるが上になほ添へ加ふる意の豆爾波で、萬葉には副の字をあて

ゝある。多分添の轉であらう。

梓弓をして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてん

(九) ノミ、バカリ この二つはいづれもよく似た豆爾波で、たゞそれ一つで他になき

をいふものである。あゆひ抄云のみとばかり二詞よく似てことのはかたがへり

云々のみは其一すぢをあらためぬ心ありばかりは其ひとつにてふたつにあよば



ぬ心あり。

ひとりのみ眺むるよりはをみなへし我すむ宿に植てみましを  
名にめてしをれるばかりぞ女郎花我ちちにきと人にかたるな

(十)カ この二つはいづれも疑ふ意の豆爾波で、文中にある時は其末を活用言の連體法で結ぶべきものである。

いつのまに紅葉しぬらん山櫻きのふか花の散るを惜みし  
花のちることやわびしき春霞立田の山のうぐひすのこゑ

然しながら此二つの豆爾波の間に幾分の區別が元來ありはせぬかと思はるゝのは、かが動詞・形容詞・助動詞をうけると、やは常に其終止法かは常に其連體法に續くといふ違のあるのも分る。

ある花もあはれと見ずやいぞのかみふりはつるまでをしむ心を

明けぬるか川瀬の霧のたえくをちかた人の袖の見ゆるは

あゆひ抄にはかと思ふか人の子をのこか女子かと思ふ類やを問ふか人々子はあ  
るかなさかと問ふ類と名づけて居る。又

聲たえず鳴けやうぐひすとせに再びとだに來べき春かは

もろともになきて止めよきりくす秋の別れは惜くやはあらぬ

などの様に、疑の意から轉じて反語となるやかに就ても、あゆひ抄はやはかはに似て、彼はあしなべたる理によりて靜に、これは目のあたりの勢によりて表をよさふるを違へりとす、これがとやのたがひめなりと説明して居る位で、古人も既に其間に差別のあつて居ることを認めて居つたのであるが、韓語にも疑問の豆爾波に *ya, ka* の二種類があつて、其中の *ya* は現在、*ka* は多く未來の疑に用ひられて居ることから推して考へるに、國語の *や* *か* にも或はこれと同様の區別が本來あつたのではあるまいか。たとへば來や來や來るか來るかなどを比較して見ると、來や來やの方は既に約束した人の來るのを待つ場合であるが、來るか來るかの方はさうでなく、或は來るであらうかと、未來にかけて疑ふ意を帯びて居る。勿論これは比較研究上の推測でもとくの起りはさうであつたらうといふのであるから、實際上歌文を解釋する場合に、徹頭徹尾かく心得べしといふのではない、然し、明けぬるか川瀬の霧のたえたえにをちかた人のそでの見ゆるはなどの様に、過去の場面にもあけたの



てあらうかと、やはり未來の意味が添うて居るのである。自分が連體法に未來の意味がある、と唱へることは、多くかういふ點から出て居るので、なほ此事は係結のところにて述べやうと思ふ。

前に述べた通り、やが活用言をうける場合に、其終止法に續くのが定めであるから、得や歴や來や爲やなど、すべきを得るや歴るや來るや爲るやなどとするのは誤である。

又や、かを動詞の已然法に續けて、疑又は反語とする一種の用法がある。

しほたる、蚤の衣にことなれや、結へともなほあわに見ゆらん

山科の音羽の山の音にだに人のしるべくわがこひめかも

あれにけりあはれ幾世の宿なれや、住みけむ人のおとづれもせぬ

此類は、多くなれや、たれや、けれや、ぬれや、めやらめや、めかも、と續いて居るが、感動詞

のやと甚だまされ易い。これはもと過去に就て、疑つたものらしく思はれる。何

誰幾等の下に來る疑問の、豆爾波は必ずかである。

誰がため錦なればか、秋ぎりのさほの山べを立ちかくすらむ

但し前條に述べた已然言に接する場合には、やを用ひる。此點から考へても、かは未來を疑ふものであると思ふ。

第三項 動詞の下につく豆爾波

(一) これは原因結果を表はす兩句の間をつなぐ豆爾波で、活用言の已然法を受けると既定の意を表はし、不定法を受けると未定の意を表はす。

月見れば千々にものこそ悲しけれ、我身ひとつの秋にはあらねど

あはずして今宵明けなば、春の日の長くや人をつらしとちもはん

又別に、ののの意の一種の古格がある。

見てもまたまたも見まくの欲しければ、馴るゝを人は厭ふべらなり

此類のばの下に、然らぬ理なるをといふ意を含めて、普通のばの如く解すべしとい

ふ説があるが、至極尤の様に思ふ。

(二) ト、トモ、ド、ドモ、これはいづれも原因と其反對の結果とを表はす兩句をつなぐ

豆爾波で、ともは動詞の終止法、形容詞の副詞法に接して未定の意をなし、とも

は動詞形容詞の已然法に接して既定の意をなすものである。前條のば、本條のと



もども等は其下に來る活用言と時に於て照應せねばならぬが、これは後に述べる。

あらしのみふくめる宿の花すゝきほに出たりとかひやなからん

今日來ずは明日は雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや

終にゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

ひとふるす里をいとひてこしかども奈良の都もうきななりけり

上記の接續法を誤つて得とも爲とも來ともなどを得るとも爲るとも來るともな

ど、するのは誤である。また、雖の意はとどにあつてもは添語であるのを、本末を

轉倒して爲ともを爲るもなど、するのは一層の誤である。勿論苟賤しくとも

意などの特例もある。

(三)ニ、ヲ、ガ、いづれも活用言の連體法に接して、事の意外に出でたることを示めす

ものである。此中がは古いところに其用例がない。

有明の月はまたぬに出でぬれどなほ山ふかき郭公かな

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかに散れとか風のふくらん

(四)テ、これは動詞助動詞の連用法に連り、一事を終へて他に移る意を表はす互爾

波である。このては半過去助動詞の活用だといふ説もあるが、自分はこの互爾波のテ、半過去助動詞のつ、外つ國天つ風などのつは、いづれも處の義の古語から出たものと考へて居る。しかし、これは韓語と比較して説明せねばならぬことであるから省略する。

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほすてふ天の香山

(五)テ、これは打消助動詞のずとしてとの約なるずての更に約まつたもので、動詞

助動詞の不定法に連り、打消の意を表はすものである。

中々に消えはさえなてうづみ火のいきてかひなき世にもあるかな

(六)ツ、これは半過去助動詞の重なつたもので、雪はは降りつゝは降りつ降り

つの義である。

### 第五節 感動詞

感動詞は喜怒哀樂等物事にふれて發動する情を表はす語であらやなど本來の嘆聲を寫すものとあはれいかになど他の品詞から轉じて來たものと二種類が



もども等は、其下に來る活用言と時に於て照應せねばならぬが、これは後に述べる。

あらしのみふくめる宿の花すゝきほに出たりとかひやなからん

今日來ずは明日は雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや

終にゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

ひとふるす里をいとひてこしかども奈良の都もうきななりけり

上記の接續法を誤つて得とも爲とも來ともなどを得るとも爲るとも來るともな

ど、するのは誤である。また雖の意はとどにあつてもは添語であるのを、本末を

轉倒して爲ともを爲るもなど、するのは一層の誤である。勿論荷(賤しく)とも

意などの特例もある。

(三)ニ、ヲ、ガ、いづれも活用言の連體法に接して、事の意外に出でたることを示めす

ものである。此中がは古いところに其用例がない。

有明の月はまたぬに出でぬれどなほ山ふかき郭公かな

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかに散れとか風のふくらん

(四)テ、これは動詞助動詞の連用法に連り、一事を終へて他に移る意を表はす豆爾

波である。このては半過去助動詞の活用だといふ説もあるが、自分はこの豆爾波のテ半過去助動詞のつ、外つ國天つ風などのつは、いづれも處の義の古語から出たものと考へて居る。しかし、これは韓語と比較して説明せねばならぬことであるから省略する。

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほすてふ天の香山

(五)テ、これは打消助動詞のずとしてとの約なるずての更に約まつたもので、動詞

助動詞の不定法に連り、打消の意を表はすものである。

中々に消えはさえなでうづみ火のいきてかひなき世にもあるかな

(六)ツ、これは半過去助動詞の重なつたもので、雪はは降りつゝは降りつ降り

つの義である。

### 第五節 感動詞

感動詞は喜怒哀樂等物事にふれて發動する情を表はす語であらやなど本來の嘆聲を寫すものとあはれいかになど他の品詞から轉じて來たものと二種類が



ある。

第一項 他の語の上に置くもの

- (一) ああ。あゝ。あゝ盛なるかなあゝ尊としやあゝとかたぶきて居たり。
- (二) あな。あなかしこあなうらやましあなこひし。
- (三) あはや。

まゝをへてちくる瀧の白絲はぬける玉とはあはやみるらん

- (四) あはれ。旅にこやせる此旅人あはれあはれ旅人にこそあなれ。

- (五) あら。あら有難やあら恐ろしや。

- (六) いか。いかにさわやかになり給へりや。

- (七) いさ。

鏡山いさ立よりて見てゆかむとしへぬる身は老やしぬると

音にのみさよてはやまじあさくともいさくみて見ん山の井の水

- (八) いて。

いて我を人などがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ

- (九) すは。すは一大事なるぞ。

- (十) やあ。

思ひ出づることもあらじと見えつれどやといふにこそ驚かれぬれ

- (十一) やよ。やよや待てやよほととぎすやよいかに。

第二項 他の語の中又は下に置くもの

- (一) は。いかじはせんはいづらは秋の長してふ夜は。

聲たえずなげや驚ひとせにふたゝひとだに來べき春かは

諸共になきてとめよきりふす秋の別れはをしくやはあらぬ

- (二) も。

ふきまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこころの

足引の山どりの尾のしだり尾のながくしよをひとりかもねん

玉の緒よたえなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

- (三) や。

珍らしや昔ながらの山の井はしづめる影ぞぐちはてにける



世の人は蝶や花やといそぐ日も我心をば君ぞしりける  
 さみが住む宿のこずゑをゆく／＼とかくるゝまでにかへり見しはや  
 其他せばやあさましの様やなどはその上によけむなりなど、動詞を省いたもの  
 ある。この感動のやと豆爾波のやとは甚だまぎららしい場合が多いが感動のや  
 は必ずしも活用言の終止法につき、又其末を連體法で結ぶに限らない。

(四)を。  
 立とまり見てを渡らん紅葉ばは雨とふるとも水はまさらし  
 つゆけくて我衣手はぬれぬとも打てを行かん秋はぎのはな

大槻博士は、苦をあらみ瀬をはやみなどのををも、感動詞とせられて居るが、自分は  
 此等のをば豆爾波のをてあると考へる。なほ、此ことは後段接尾語の條で述べう。

第三項 他の語の下に置くもの

(一)かし。  
 眺むれば月かたぶきぬあはれ我この世のほどもかばかりぞかし  
 さても君忘れけりかし鶯のなくをりのみやちもひいづべき

(二)か<sup>か</sup>も<sup>かな</sup>。か<sup>か</sup>も<sup>かな</sup>は前條のものながこのか<sup>か</sup>に重なつたもので、此等はいづれ  
 も活用言に添ふとき、その連體法に連なる。

二葉より頼もしきかな春日山こだかき松のたねぞと思へば  
 吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりも行くか人の心の  
 いまもかも咲き匂ふらんちちばなのまじまがさきの山吹の花

(三)が<sup>が</sup>も<sup>が</sup>な。いづれも願望を表はす感動詞てもが<sup>が</sup>しが<sup>が</sup>など、必ずしもしに續け  
 て用ひられる。

我やどの尾花が上の白露をけたずて玉にぬく物にもが  
 こゝろうし深き山にもいりにしがのとかにをりてうき世すぐさん  
 河原のゆづ岩村に草むさず常にもがもなとこととめにで  
 君がためをしからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

(四)な。  
 来て見べき人もあらしな我宿の梅のはつはなをりつくしてむ  
 花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふる眺めせしまに



五) ねなむ。これらも亦願ひ詠ふる意の感動詞で、いづれも動詞の不定法に連なる。

春風は花のなさまに吹きはてね咲きなば思ひなくて見るべく  
せみのこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば

焼かずとも草はもえなむ春日野をたゞ春の日にまかせたらなむ  
最後の例の「もえなむ」のなむは半過去未來で、「たらなむ」のなむは願のなむである。

此等はその接續の方法と前後の文意とによつて區別すべきものである、即ち助動詞のなむは連用法に連なり、願のなむは不定法に連なるのである。

(六) よ。

忘れずよまたかはらずよ瓦屋の下たくけふりしたむせびつゝ

大槻博士が感動詞の中に敷へられた、紀の關守いなどの「い」を自分は改めて、互爾波のうちに加へた。

### 第六節 複合語

複合語は數語相合して、特別の意義をなすものである。其中に複合の一次的で、よその成分のわかるものと、さうでないものとの二種がある。

#### 一 複合名詞

山川草木露霜善惡勝負請取などは、その複合が一時的であるから意味も従つて二つ別々のものをたゞ合せたばかりである。しかし、祝詞(宣り語)商人(秋人)餉乾飯(曉(明時)都宮處)刃焼刃黄昏誰彼時(牧馬城)前眼邊(柳矢の木)檜火の木(腕)上手(甥男人)姪(女人)などは、全く融合して、一見その成立ちを知ることが出來ぬ。旅籠(瓢箱籠)などの「こ」が籠の古言であるなども亦一例である。

#### 二 複合動詞

羨(心病)試(心見)遠(遠離)慮(思計)名(名告)赴(面向)傾(片向)退(尻離)など。

#### 三 複合形容詞

うれたし(愁痛)幼(長無)逸(早)細(長)しなど。

#### 四 複合副詞

况言は(んや)剩(餘りさへ)濫(亂り)に(今更)所謂(云はるゝ)有(謂)有(らるゝ)須(爲)へ(からく)苟



(賤しくも)など。

五 熟語接續詞

或(有謂は)抑(其も)く(就中加之)しかのみならず(など)。

第七節 疊語

疊語は同じ語を二重にかさねて用ふるもので、次の如き色々の種類があり、又その表はすところも一樣でない。

一 名詞の疊語

- (一) 複数の意を示めすもの。津々浦々、様々、品々、人々、國々など。
- (二) 副詞となるもの。山々、度々、月々、年々、時々、折々、日々など。

二 動詞の疊語

動詞の疊語は凡て副詞となる例へば、ますます(増々)、ありく(有々)、行くく(返すく)、絶えく(など)其他、知らずく(の如く)動詞の疊語もある。

三 形容詞の疊語

花々し物々し雄々しなど、名詞の疊語より轉じたものもあり、馴々し晴々しの如く、動詞の疊語より轉じたものもある、又重々し輕々し長々し等、形容詞の疊語もあるが此等はいづれも其原義を深めるものである。

四 複詞の疊語

げにくいとくなほく(など)いづれも其意味をつよめるもので、なかくいよいよ(など)生れつき疊語の形をして居るものもある。

第八節 接頭語 接尾語

接頭語は他の語の頭に添ひ、接尾語は他の語の尾に付いて、これに様々の意味を添へるものである。然しながら、此等の語は既に其原義の一部もしくは全部を失うてもはや獨立に使用せられることのないものである。例へば、搔鳴らす、搔疊るなどの搔は、勿論搔くといふ動詞から出たものであるが、この様に用ひられる場合には、もとの意味の一部を失うて居る。其他、次に擧げるものなどは、殆ど全く意味を失うて、中には接頭語の添うて居ることさへ氣の付かぬものが多い。



石上(い)其(い)上(い)争(争)ふ及(及)い坐(坐)すなど。  
 いち。いちしろし(い)いちばやぶ(い)など。  
 いろ。いろ母(母)いろ兄(兄)いろ弟(弟)いろ姉(姉)など。  
 か。か弱(弱)しか易(易)しなど。  
 け。け壓(壓)さる(け)長(長)しなど。  
 さ。さ迷(迷)ふ(さ)牡(牡)鹿(鹿)など。  
 た。蓄(蓄)た加(加)ふ頼(頼)た祈(祈)む貴(貴)た太(太)し欺(欺)た計(計)る助(助)た助(助)くた靡(靡)くた易(易)し縁(縁)た頼(頼)る(た)など。  
 ま。真(真)魚(魚)真(真)心(心)誠(誠)真(真)事(事)横(横)真(真)木(木)薄(薄)真(真)草(草)など。  
 を。を長(長)谷(谷)を山(山)田(田)など。

接尾語もまた同じく原義を離れて、文法上の形式のみを示めずか或はたゞ無意味に他の語の尾につけ加へられる。

一 複数の意を示めすもの

など。これは「何との約まりて例へば、月花など歌などなどである。  
 ども。女ども子どもなど。

股  
ア  
リ

どち(ど)ち(ち)たち。此(こ)兩(りょう)語(ご)は、も(も)と(と)同(どう)一(いつ)の語(ご)であ(あ)つ(つ)た(た)ら(ら)しい(い)が、後(のち)にな(な)つ(つ)て(て)た(た)ち(ち)は單(だん)に多(た)數(すう)の意(い)を示(し)め(め)し、ど(ど)ち(ち)は同(どう)類(れい)同(どう)種(しゆ)の意(い)を(を)含(こ)む様(よう)にな(な)つ(つ)た。和(わ)訓(くん)栞(し)云(い)た(た)ち(ち)はど(ど)ち(ち)の轉(てん)訛(し)、萬(ま)葉(えふ)集(しゆ)にど(ど)ち(ち)は共(こ)字(じ)、た(た)ち(ち)は等(とう)の字(じ)を讀(よ)めり。例(れ)へば、奴(やつ)ばら殿(とん)ばら法(はふ)師(し)ばらな

ど。  
 ら。君(きみ)ら僕(わが)ら是(こゝ)ら其(その)ら子(こ)らな(な)ど。

二 名詞を表はすもの

ら。希(まれ)ら宵(よ)ら夜(よ)ら幾(いく)らな(な)ど(ど)のら(ら)は、殆(たいてい)ど(ど)と(と)り(り)た(た)て、い(い)ふ(ふ)ほ(ほ)ど(ど)の意(い)味(み)もな(な)い(い)が、古(いにしへ)く形容(けいごう)詞(し)動(どう)詞(し)にも添(そ)うて戀(こひ)し(し)ら佗(た)し(し)ら思(おも)ひ(ひ)らな(な)ど、用(もち)ひ(ひ)ら(ら)れ(れ)て居(ゐ)る。語(ご)源(げん)はま(ま)だ充(ちゅう)分(ぶん)に分(わ)らな(な)い(い)が、多(た)分(ぶん)古(いにしへ)い(い)豆(まめ)爾(に)波(な)の残(のこ)りてあ(あ)ら(ら)う。一(ひと)人(にん)二(ふた)人(にん)のり晝(ひる)夜(よ)のる、其(その)他(た)豆(まめ)爾(に)波(な)よ(よ)り、か(か)ら(ら)の條(ぢょう)に擧(あ)げ(て)置(お)いた、出(い)所(しよ)不(ふ)明(めい)のら(ら)り(り)ろ(ろ)な(な)どを合(あ)せて参(ま)考(こう)するが

よ。ら。  
 け。朝(あ)け夕(ゆふ)け霜(しも)け雪(ゆき)けな(な)ど。  
 げ。人(ひと)げ心(こゝろ)あ(あ)り(り)げ悪(わる)げ嬉(うれ)し(し)げ惜(あは)し(し)げな(な)ど。  
 さ。遠(とほ)さ善(よ)さ會(あ)ふ(さ)行(い)く(さ)歸(かへ)る(さ)な(な)ど。



予が活用の一種に敷へて置いたみを、大槻博士は接尾語の中に加へられて居る。此ことについての私見は、既に活用論の所に十分述べたつもりであるが、なほ参考のために一言つけ加へて置く。このみは獨り重み、安み、疾みなど、形容詞の名詞法を作るのみでなく、老見、幼見など動詞にも見へ、ことに助動詞には可み、不みなど、其例に乏しくない。これによつて見れば、このみが活用の一部分たることは、もはや疑ふ餘地がないと思ふ。既に前にも述べたことであるが、なほ次の一例によつて、十分このみが活用中に加はつて居る有様を知るがよい。

- 淺し (形容詞) *asa-si*
- 淺み (名詞法) *asa-mi*
- 淺まし (形容詞) *asa-ma-si*
- 淺む (動詞) *asa-mu*
- 淺むく(欺) (動詞) *asa-mu-ku*

三 動詞を表はすもの

この類は、大方予が前に論じた、m及びk形の古活用の残りものである

めく。これは四段活用の自動詞を作る例へば、春めく、なまめく、時めく、色めく、ちぼめくなどである。

此等は狭し、塞く、攻む、闘めく、淺し、淺む、欺むくなどの、めく、むくと同じ性質のものと思ふ。

めかす。これはめくの他動形で、四段に活く。これも動く、蠢めく、蠢めかすの如き順序をふんで發達した形で、時めかす、今めかすなどの例もある。

がる。これも四段活用で、例へば、面白がる、たのしががる、あはれがるなど、いづれも、げあるの約まつたものらしい。

ぶ。これは上二段活用で、古ぶ、里ぶ、鄙ぶなどであるが、樂しより樂しむ、樂しぶの出來ることを考へると、このぶももとは、m形活用より出來たものらしく思はれる。

ぶる。これは頗(コ)少ぶる(い)なぶる(ひ)たぶる(は)やぶる(な)など、四段に活くものであるが、いなぶるに對して、いなむのあることから推して考へると、これもm形活用より出たものらしい。

此他、黄ばむ、塵ばむのばむ、伴なふ、幣なふ、商なふのなふ、幸はふ、味はふのはふなども



あるが、いづれも其本義が不明で、たゞ形式のみに用ひられるから、まづこの部類に入れて置くべきものであらう。

四 形容詞を作るもの

がまし。をこがまし他人がましなど。  
たし。聞きたし見たし有りたし持たしなど。

五 副詞を作るもの

ながら。これは、豆爾波からの條に述べた通り、語源は「處らて、其儘」の意である。  
萩のつゆ玉にぬかんと取ればぬよし見む人は枝ながら見よ  
手づから身づから己づから口づから心づからなどのつからは、丁度これと同じ構造である。

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつるふとみむ  
ながらは、また轉じて、なれども」の意に用ひられることがある。

誰とてかあれたる宿といひながら月よりほかの人をいるべき  
ものから。これは前條のながらともとの合したもので、ものなれども」の意に用

ひられる。

ほとゝぎすなが鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから  
すがら。このがらも、語源はながらのがらと同じであらう。夜もすがら夜もすが  
ら夢もすがら道もすがらなど、用ひられる。

がてら。がてはごと(如、韓語 가터 (同じ)と同根で、これに接尾語らの加はつたものである。

我宿の花見がてらに來る人はちりなん後ぞこひしかるべき  
古くは、がてらをがてりともいつて、山の邊の御井をみがてりなど、用ひて居る。  
がてに。これは難の意である。

憂世には門させりとも見えなくになどか我身のいでがてにする  
からに。これは、故にの意に用ひられて居る。紀に因已物而泣などあれば、豆爾波  
のからより轉ぜるものかとも思はれるが、また古く故をかれとよませてあるから、  
からのからも、或は故の字音と接尾語らとの結びついたものではあるまいかと  
思ふ。若しさうであれば、韓語 토로 (故)の義も全く同一の組織であるから、上古